

357
122

5 6 7 8 9 10¹⁸m 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20¹⁸

始



36.10.25

357-122

評論兼介紹
現代英國劇作家



大田黑元雄著



此の書を今村治夫
石本音彦の兩君に



自序

一昨年から昨年へ掛けて一ケ年半程の倫敦滞在中、市の中央にある學校に通つた自分は、ハムステッド、チャーリングクロス間を毎日の様に地下電車で往復した。自分は此の電車内の退屈を凌ぐために讀書を始め、特に劇を好んで、其のいろくを讀んだ。此の書の中に擧げられた八十餘の作品も皆こゝして、煙草の煙の立籠めた騒々しい電車内で讀まれたのである。自分は此の電車内の讀書を紀念したかつた。此の書は全くそいふ要求の産物である。此れの大部分は倫敦で書かれた。けれども其の完成は或る事情のために遅らされた。

自分は経済學の學生である。且つ劇に注意し始めたのは、僅かに此の一年半に過ぎない。従つて知るところの極めて尠く且つ淺いのは、自分にも明かな事である。其れにも關はらず自分は此の様なものを書いてしまつた。其の結果は既に今日、自分さへ不満足である。けれども自分は此れが尠くも倫敦の生活と、廿一二歳の頃の自分とを思ひ出させる種として残るであらうと信じて居るので、此の上の訂正を敢てしない事とした。

大正四年二月

大森に於て

著者

目次

バーカー……………一
 ガルスウチャーシイ……………三
 メースフィールド……………四五
 ハウトン……………五五
 ショウ……………六九
 シング……………一六三
 イエーツ……………一九九
 レディグレゴリイ……………三二

グラントヴィルバーカー

H. Granville Barker

俳優として成功し又プロデューサーとして成功し、更に劇作家として極めて重要な地位を英國の劇壇に得たグランヴィル・パーカーは珍しい才人と云はなければ成らない。事實彼は大きい意味での才人である。彼の地位は世界の劇壇から見ても最も多くの價值を附するに足りるものである。俳優としての彼の生活は終つた。目下の彼は興行主とし、且つ舞臺監督として最も努力して居るのである。或る評家は劇道の事でパーカーの出来ないのは背景を描く事だけであるが、それさへ若し習ふ氣があつたならば、出来るように成るであらうと云つて居る。其れ程彼は多能で且つ年が若い。兎に角今迄の彼は殆んど往く所として可ならざるはない有様である。そして老人の勢力の強い倫敦の劇界に、まだ青年と云つてもよい位な彼は立派な根據を持つて居る。彼の優れた才能は此の一

事からも察知する事が出来るであらう。けれどもこゝには唯劇作家としての彼と其の作物に就て記すのにとゞめて置く。

パークーの作品はガルスウチャーシーのものと同並んで近代的である。理智的な點に於て現今の英國劇作家中、彼の右に出るものは恐らく無いであらう。

人の知る如く、パークーはショウの弟子で、従つて其の影響を受けて居る人である。其の生活上にも簡易を好み、又菜食するなどは全くショウの流に従つたものである。

併し彼の劇に現はれたところには、ショウやガルスウチャーシーに比べて幾多の相違がある。此れは恐らく彼の天然の性格に依るものであらうと思はれる。勿論一般の近代劇作家の常として彼の劇も亦概ね、近代文明の缺陷や、愚劣な因

襲などの攻撃且つ批判である。けれども彼の特長は其の態度の平靜な事にある。彼は常に平靜を忘れない。そして常に軽いユーモアを有して居る。ホルブルック ジャクソンは彼を評して劇壇のバックだと云つた。或はそうかも知れない。尤も「夏夜の夢」に出るもの程軽くはない。併しショウやガルスウチャーシーが疾呼する時に、パークーが猶平然として微笑の影をとゞめて居るのは事實である。ショウの作は常に彼獨特の哲學を強辨する道具だと見れば見られ得る。ところがパークーの作は全く彼の見た人生の反映である。此の點に於て彼はショウと全く相違して居る。ショウ劇の人物が皆思想のために現はれて、極端な性格を極端に働かして居るのに對して、パークーの作に現はれる人物は皆彼等自身のために存在して居ると云つてもよい。彼等は寧ろ革命的の思想を持つて居るかも知れ

ないが、其動き方は極めてノーマルである。彼等は無論各種の議論を戦はずけれども、シヨウに書かれた人々の如くにコンヴァーシオンを目的としては居ない。パークアの劇作家としての長所はこゝにある。即ち彼の作は常に「思想の爲めの劇」と「劇の爲めの劇」の巧みな調和である。こゝに「思想の爲めの劇」といふのはイブセンの作品の様なもので、「劇の爲めの劇」といふのはピネロなどの作の様なものを指したのである。

パークアの最初の作「アン・リートの結婚」(The Marrying of Ann Leste)は風変わりなものである。此れに扱はれた材は一種皮肉な、貴族的な、而かも優美な感じのものである。多くの批評家は皆此の作をメレディスのコミカル、センスと共通な空気を持つて居ると云つて居る。此れはコメディと名附けられた。

時代は十八世紀の終りであり、所は英國のレッディングである。従つて作に出る人間は皆十八世紀の人間である。しかも彼等は今日の間とも見られ得る。要するに新と舊との調和が巧みに取れて居て、其の間に不満の點を見出し得ない。これは明かに作者の理智の働きに依るものである、音楽で云へばリヒアルド、シトラウスの「薔薇の騎士」が近代風の音楽を用ひて、よくマリアテレザ時代の空気を出して居ると似て居るところがある。

アン・リートといふのは娘の名前である。彼女は多くの貴族達の申出を辭つて、結局一人の園丁の妻と成つてしまふ。彼女は貴族達の性格や生活に著るしい不満を持つて居た。園丁のアバッドは健かな身體と、明かな眼を持つて居た。そして彼は若く且つ男であつた。多くの人はアンを不幸と思ふかも知れない。又彼

女をローマンティックだと思ふかも知れない。けれどもアンに取つては、此の無名の園丁の方が多くの貴族達よりも遙かに男としての價値を有して居た。最後の幕は新夫婦の狭い且つ汚い家に極めて美しく終つて居る。二人の會話の何でもない部分によく作家の理智と機智とは動いて居る。しまいにアンは「妾は今迄生きるのを恐がつて居たけれども、今は満足しました」と云ふ。そして彼方の小さい戸の所に行つて、之れを開ける。アバットは蠟燭を以て其所を照らし乍ら「灯を見せよう。階子段は急だから」と云ふ。彼が灯を手にして其の新妻の階段を上つて行くのを見て居る間に幕に成るが、何とも云えない美しさが感ぜられる。アシユレイ、デュークスは此の場をパークアのすべての作中での最も美しいものだとさへ推賞した。何れにしても此の女主人公は十八世紀の女ではない。

而かも不思議に大して矛盾を感ずる事がない。此れはパークアの最初の試みではあるが、舞臺に經驗の深い彼の事であるから、テクニクは極めて上手なものである。第一幕などには十八世紀といふ氣分が特によく現はされて居る。

次ぎの作は此れと全く趣を異にした「ヴァイセイ家の遺産」(The Voyage Inheritance)である。此の作に至つて、其の空氣はメレディスを去つて、ショウに移つた。特に「ウィドワース、ハウセズ」とは近似の點を有して居る。ショウの此の作で貧民窟のランドローディズムと云ふものゝ害が中心と成つて居るのに對して、此のパークアの作では、辯護士が依頼人の金を、信用を楯に、私用に宛てて、しかも此の不正行爲が先代から繼承されて居る事が主題と成つて居るのである。唯前者で地主のサルトリアスが此れを避け難いものとし、寧ろ此れが貧

民に思慮を興えて居るものと主張し、彼の娘と結婚したトレンチも亦遂に此れを認めさせられて居るのに反して、後者では其の主人公たるエドワード、グライセイが倦く迄此の不正行爲の繼承を肯せず、此れを公開して總べての改革を斷行し、其の事業を正當なものたらしめようとして苦んで居る。更に前者では其の終尾がショウ流のアイロニイを人に感せしめて居るのに反して、後者では全く其の事が無い。

「グライセイ家の遺産」に現はされた作家の技巧中最も感嘆すべきは、英國の清流の家庭の生活といふものゝ描寫である。けれども難を云えば其の描寫が少し堅い線計りに依つて居る傾がある。即ち少しセンチメントといふものに缺けて居る傾がある。けれども作家が獨特のユーモアを用ゐたところは、極めて自然

な感じを有して居る。

前に書いた如く、グライセイ父子の職業は甚しい不徳に依つて形成されたものであつた。ところが父のグライセイが病歿する。息子のエドワードは此の仕事を繼ぐ事に成つた。彼は父の在世の頃から此の不徳の行爲を知つて、種々に心を悩まして居た。父親の葬儀が済んだ後、彼は意を決して總べての真相を一族の人々に發表した。其の中には依頼人クライアントと成つて居る人もあつたので、此等の人々は驚いてエドワードを責める。彼等はエドワードを信用して、彼の思ふ所を斷行させる程の善意を持つた且つ理解のある人達では無かつた。彼等の望むのは唯自身の金の安全のみであつた。其の結果としてエドワードは或ひは告訴されて入獄の恥を受けなければ成らない事に成つてしまつた。此等の人々の中で、

唯一人従妹のアリスと云ふ女は始めから彼に同情して居た。最後の場で男は不快な仕事に頭を痛めて居る。彼は獨りで世の中に生きて行くのが恐ろしく成つた。入獄といふ事が殊に彼の心を壓した。

出獄の日に彼は總べての友人を失ひ兼ねてホームと云ふものさへも得られまいと云ふ想像は特に彼の心を寂しく且つ悲しくした。此れを見たアリスは其の真情をほのめかす。男は感謝の籠つた短かい言葉で、自分と結婚して呉れるかと尋ねる。女は此れを承諾した。けれどもエドワードは己れの境遇を考え、此れの影響を受ける女の將來を思つて、此れを取消さうとする。女は「妾の生きて居る間は……妾の居るところがホームに成るでせう」と静かな力の籠つた聲で答える。そして遂に二人は薄黒い悲みの中に限りない満足と喜悅と勇氣とを

獲得、光明ある明日を眺めながらに終つて居る。此の最後の場は非常に美しい、力の籠つたものである。パーカーの女性は一體に理智の勝つた、骨だらけの様な感じのするのが多いのであるが、此のアリスは理性に富み且つ優しい女らしい同情と勇氣とを有して居るために最も自分を喜ばせる。

パーカーは如何にも自然らしい技巧を好む作家である。ガルスウチャーシイが技巧を用ゐない様に見せて、却つて細かいところに技巧らしい技巧の痕跡を止めて居るのに反して、彼のは極めて自然である。一例を擧げて見ればエドワードの父親は、二幕目で風邪を引いて居る。そして第三幕は忽ちに彼の葬式の後に成つて居る。然し、彼の死は其の前の幕の風邪から直ぐに起つたものとは成つて居らない。

パークーの書く人物は皆中々物を云ふ。けれども無駄を云はない點に於ては、ガルスウチャーシーに等しい。勿論英國の中流の家庭を寫す上には必要な無駄があるが、此れは無駄でない無駄と見なくては成らない。作中エドワードの母即ちグライセイ夫人を描いたところの如きは其の例である。パークーのト書は全然シヨウ流である。綿密であり文章體である。特に劇中の人物の容貌、態度等を寫すところなどはそうである。

「無駄」(Waste)に成つて作家は悲劇を試みた。そして墮胎といふ事が作中に出たために、公演を禁止されて居る。此の「無駄」は、有爲の人物の無駄な死を描いたものである。此の作の主人公は極めて才能のある政治家と成つて居る。そこに政争が起り主人公は此の政争に破れた。けれども此れは彼に取つて大し

た打撃では無い。唯彼は或る友人の妻君と不都合な關係を生じて、其の女は妊娠する。彼の此の行爲は其の女が墮胎を試みて、其の結果死亡した事から、其の夫並びに他の少數の友人の間に知れてしまった。主人公は最も強い意志を持つた男である。けれども此の事が世間に知れた場合には、因襲の爲めに、彼は世間から葬り去られなければ成らなく成つた。彼は此の不名譽に生きるよりも自殺する事の遙かに容易なのを感じて、遂に此れを敢行してしまふ。併し彼を刺戟したのは、此の不名譽の外に、猶女の死と云ふ事があつた。彼は此の女を愛して居たわけではない。又彼は女の死に同情をも持ち得なかつた。殊に其の死が墮胎の結果だと云ふ事に、彼は寧ろ憤りを感じて居た。唯此の女の死に依つて、己れの血を受けた子供が世の中に出ないで終つたといふ一事が、深く彼

の頭の中に喰ひ込んだのである。彼の自殺には此の感情の衝動が極めて重い原因と成つて居る。次ぎの對話は最後の幕で主人公の自殺前に其の妹との間に交されるもので、最もインプレッシヴなものである。主人公の名をトレベルと云ふ。

トレベル「馬鹿め。馬鹿め。……何故己れの子供を殺したんだ。……お前は己れが無情で、女が社會的に不徳なのを知らなかつたと思ふかい。併しどう自然がそんな事を構つたらう。しかも自然が我々を破壊してしまつた」

妹「あなたちやありません。あの人は死にました。可愛相に……でもあなたちやありません。」

トレベル「いゝや……此れは誰しも自身入つて見る迄は信じる事の出来ない不思議だよ。男は女が腹の中に妊む代りに、心の中に子供を妊むものだ。」

作者は總べての力を無駄の一點に集めて居る。

主人公の若い秘書が、此の急變を聞いて叫ぶ言葉に最後の幕は終つて居る。彼は此の原因に就ては全く知らず、又知り度いとも思はない。唯此の大きい無駄に對しての憤りのみが彼の心に強く起つた。

「マドラス、ハウス」(The Madras House) は四番目の作であり、此の作家の最近のものである。前の「ヴォイセイ家の遺産」なども困難な作に相違ないが、此の「マドラス、ハウス」は更に困難なものと思はれる。(困難といふのは、書くのに非常な手腕を要するといふ意味で用ゐられた。)事實此の作の如きは字義通りの問題劇、社會劇である。「マドラス、ハウス」と云ふのは料理店の名前ではない。倫敦の贅澤屋町として知られて居るボンド街にある婦人服裝店の屋號である。

けれどもマドラス、ハウスは此の作の方便として用ゐられたものなので、此の店の問題が此の作の總べてではない。作家は此の中に前の、「ヴァイセイ家の遺産」に現はした様な巧妙さを以て、英國の中流の家庭を再びうつした。

作はマドラスハウスといふもの、賣却を中心として居る。此れをめぐつて種々な人が動く。主人公をフィリップと云ひ、其の妻のジュシカを始め其の両親や其他が加つて主眼と成る。フィリップの父は不品行をした結果、長い間其の妻と別れて、外國に住んで居る。けれどもマドラスハウス賣却の問題が起つたに、彼も倫敦に來る必要を生じて、こゝに彼は其の妻と三十年振りに逢ふ。けれども其れは面白からぬ結果に終つた。此の父親は一夫多妻主義者でマホメット教徒の生活をして居る。フィリップは幸か不幸か異性に對して、全く父とは反

對の觀念を抱いて居た。彼は現今の社會に不満を有して居る人である。特に兩性の關係といふものに著るしい缺點のあるのを感じて居る。彼は此の問題に就て一種のアイデアリストであつた。彼の妻も亦一種のアイデアリストで、且つフェミニストである。フィリップは人生の眞の幸福と美とを探し求めて居る。そして此等を得るための生活に入らうとする。けれども其所には多くの障害が横はつた。妻のジュシカの位置が既に一種のディレンマにある。けれども二人は目的に向つて努力しようとする。そして一種の幸福をそこに感じた。大詰のト書は次ぎの如くである。

「彼女は語を終らない。事實此の問題は果しのないものであるから。けれども僅かの間、お互ひに幸福に成つて、火の中を眺めながら、其の場に立つ。」

事實作家は解決し難い問題を取り扱つた。解決の出来兼ねる問題を主として、此れを未解決の儘に、残した此の作は如何にも問題劇に相違ない。此れは五幕の長い物であるが、各種の變化を持ち、且つ作家の圓熟したテクニックを見せて居る。作家の目的は問題を未解決の中に、残す事であつたらうと考へられる。若し「兩人が幸福を感じる」といふ事を目的としたものならば、其の到達する迄の段取が長過ぎて居る。

フィリップは前のエドワードの變形とも見られる理智に富んだ且實際的の男である。妻ジュシカはパークアの女性中異彩を放つて居る者で、他の彼の女性が皆所謂近代的に動く中に、彼女一人は女としての美、チャーム等の總てを有して居る。此の作でもバランスはよく取れて居るが、第五幕即ち最後の幕の後半の主人

公夫婦の對話は稍「劇として」と「思想として」の劇の調和を破つた傾きがある。此の時には明かに思想の方が重過ぎた。しかも此の部分は此れ以外に如何とも爲難かつたのであらうと思はれる。

度々書いた様にパークアの作品はどれもテクニックが優れ、且つ思想も面白い。けれども、これも四幕五幕といふ長さである。脚本が讀む爲めならば幾幕でも構はないが、此れが實演される事を必要とする場合には、長さといふ事は極めて考ふべき事だと思ふ。自分はこういふ社會劇には三幕といふのが適當な長さだと常に思つて居る。「マドラス、ハウス」の如きは作家の現はさうとするところは、四幕でも事足りたらうと思はれる。

パークアはシュニッツラーの「アナトル」を雛案した。

それからローレンスハウスマンとの合作に「プルネラ」(Prunella)といふのが
ある。此れは唯繪の様な甘い戀の小さな物語に過ぎない。唯此の小さな戀のフ
ンタジイの中には、中々美しい句がある。

此の外にロココ (Rococo) と云ふ作があると聞いて居るが、此れは本として
出版されて居ないから、こゝには何とも書く事が出来ないが、多分軽い一幕物
だつたらうと思つて居る

要するにパーカーは理智と經驗に富んだ作家である。興行主としての彼は餘
程忙しい事かとも思はれるが、近い中に又其の近業を得たいものである。事實
彼は英國の有する最も重要な劇作家の一人である。彼の如き人に對しては現今
の英國劇壇が期待するところ極めて多い。

ジョン ガルスウァーシイ

John Galsworthy

近代の社會劇は、どれも破壊と云ふ事に強い力を持つて居る。ジョン、ガルスウチャーシイは此の力を用ゐる事の最も甚しい作家である。彼の作中の重要なもの、例えば「銀の箱」「争闘」「公正」等は皆破壊といふ事が顯著な働きをなして居る作品である。ガルスウチャーシイの社會劇はハウプトマンの影響を受けて居るといふ人がある。何れにせよ彼の「争闘」「銀の箱」等は倫敦の在來の劇場には全く不向きなものであつた。ガルスウチャーシイが劇作を始めた頃、丁度コート座にグランヴィル、バーカーが立て籠つて自由劇場を始めた。ショウを世界に知らせた此のコート座の試みはガルスウチャーシイをも世人に知らせたのである。其後に成つては他の劇場即ち「デューク、オブ、ヨーク」「サヴォイ」「キングスウェイ」等にも彼の作は上場されたが、コート座で千九百六年の九月に演せられた「銀

の箱」が劇作家としてのガルスウァーシーを知らせた最初であつた。

ガルスウァーシーの作は皆社會劇である。「小さき夢」や「ジ・イ」の様な例外もあるが、此等は成功とは云へない。

前にも書いた様にガルスウァーシーの得意とするところは、破壊といふ力の發揮にある。此れに次いで彼は對照を好む。其の中の烈しい例に「争闘」「銀の箱」等がある。彼の此の對照は、其の作劇のテクニク中極めて重要なものである。此の外に其のテクニクとして人の注意を惹くのは科白の簡潔な事である。冗長な言語を用ゐずに、言外の意を見る人の心に訴えて居る事である。パーカーも時として此の簡潔といふ事に成功して居るが、ガルスウァーシー程甚しく無い。

ガルスウァーシーの描く人物は皆眞面目に行動して居る。そして多くの場合誰と同じ様に同情を惹く。「逃亡者」の中の夫れくの人物などは好例である。

「銀の箱」(The Silver Box)で作者の間はうとしたところはジャスティスといふものである。其れがために我々は此の作中議員の家、貧民の家、議員の食事、貧民の食事、議員の息子の罪、貧民の罪と云ふ様な各種の對照を代るくに見る。自分が此れを見たのはパーカーのレバトリー、シーズンであつた。その晩は、メーテルリンクの「タンタジルの死」の美しく優れた演出を見たあとで、此の寫實一方の「銀の箱」を見たために、妙にうれしく無かつたが、唯社會劇として見れば、決して悪い事はない。

「争闘」(Strife)は此の作家の作中での優れたものだと自分は思つて居る。或る

會社の職工がストライキを起した。ストライキは長く続く。職工並びに其の家族等は皆慘憺たる日を送つて居る。同時に會社の方も非常な損失に苦んで居る。ストライキの方の首領をダヴィッドといひ、會社の方のチェアマンの老人をジョン、アンソニーと云ふ。

二人はどちらも剛情である。或る日會社の重役達が工場のある町に来て會議を開いた。彼等は皆氣が弱く成つて職工の要求を容れてやらうとする。けれども老アンソニーは頑としてきかない。彼は五十年の長い間職工と戦つて常に勝ちを占めた。若し時世が變つたのにしても、自分だけは變らず、且つ其の様なものゝ影響は受けないと云ふ。争鬭のクライマックスは近附く。職工の方も其の日の夕方會議を開いた。丁度其の時に首領ダヴィッドの妻が寒さと餓えのために

死んでしまふ。此れを知つた他の職工中内心ダヴィッドに反對して居たものは一時に勢力を占めて、或る條件のもとに復業する事に決する。彼等の代表者は其の旨を告げに重役達を訪ふ。けれども彼等は遅かつた。アンソニーは他の重役達の意見に反對して辭職をしてしまつて居た。此の争鬭は兩派の最も優れた二人の倒れた事に依つて平凡な終りを告げたのである。此の作に似たものに「公正」がある。然し自分は相戦ふ兩派の力の等しいところからして、即ち總べてのバランスの取れて居るところからして此の「争鬭」の方を遙かに優れて居ると思ふ。此の様なものを書く際には此の作家一流の簡潔はよく効果を得て居る。最後の場でダヴィッドはアンソニーに面して立つ。彼は始めて己れの敵も亦斃れた事を知る。裏切られた兩派の勇士の面には、怨みの色が漸く去つて、悼はし

い同情の影が浮ぶ。こゝのテクニクなどは、ガルスウチャー・ジョイの最も得意とする所のものであらう。

「ジョイ」(JOY) は其の材が此の作家に適して居ない。けれども、明かに作家の多方面な手腕を持つて居る事を證據立て、居るものである。ジョイと云ふのは十七歳に成る少女の名前である。ジョイは母を持つて居る。其の母は夫即ちジョイの父と長く別れて住んで居る。此の母は鋭い且つ寂しい人であつた。彼女は或る男を愛して居る。ジョイは此れを知つて一圖に母が己れを侮辱したものと感じ、母に對し殊に其の相手の男に對して強い反感を抱いて居た。けれどもジョイ自身もデックといふ青年と戀に落ちる。二人が美しい月夜に老樹の下で楽しい戀を語るところで芝居は終つて居る。此の夜以後ジョイの心には新らしい感

情が湧き、此の今迄知らなかつた同情ともいふべき感情で其の母親を見、且つ其の心を理解する事が出来るであらう。事件は英國のオックスフォード近くの田舎で起つて居る。場所はジョイの母の叔父に當る或る、大佐の家の庭の芝生の上である。時は現代の眞夏の一日である。プロタゴニストを取り巻く人々は皆どれもよく人間らしく動いて居る。そして皆好い人物許りである。

社會の缺陷や不公平に對して鋭い此の作家の筆はジョイと其の愛人の夢のような戀を美しい繪の如くに描き出して居る。特別の面白味のないのにも關はらず、何となく棄て難い作品である。

「長男」(The Eldest Son) に扱はれた材は最も平凡なものである。或るバロネットの長男が其の母の侍女と關係して、女の妊娠した事を書いた此の作は、部分

部分のテクニクから云つても極めて纏つた作品であるのにもかゝらず、構想の平凡であるためか、自分には大して面白く思へない。

最も傑れて居るのは主人公が女の妊娠を始めて聞くところであらう。こゝでも例の簡潔といふ事が非常に働いて居る。主人公の青年は意を決して女を己れの妻としようとする。けれども女は此の結婚に反対した。「否」の一語が女の口から發せられた時、座にあつたパロネットや其の夫人に生色を與えた。此れを見て居た女の父の心は怒りと誇りとに燃えた。そして斷然此の結婚を辭つて去る。

此の作中に主人公の妹達が三人程出る。彼等は寧ろパーカーの女性に似て鋭く且つ強い角度を有して居るが、其の中のドットと呼ばれる一人の如きは中々よい。

「小ち夢」(The Little Dream) は六場より成るアレゴリーと呼ばれて居る。

此れは詩的な方の試みで、今迄のガルスワージーとは全然違つた材の採り方である。其の科白には美しいところがあるが、餘りに舞臺の仕掛けに過ぎ、更に全體の仕掛けに過ぎて居るために、詩といふ方を壊して居る憾みがある。此の作はまだ實演された事が無い様子であるが、若し舞臺に上せられた場合には大した効果がない事と想像される。更に作の寓意から云つても格別の事はない。「公正」(Justice) に至つて、作家は法律の缺陷を描き、且つ其の犠牲者に依つて起された悲劇を書いた。作家は此れを悲劇と云ふ。けれども深い意味での悲劇といふのには強味が不足の様にも思はれる。

或る店の手代が、或る夫ある女を愛した。女は其の亭主に常に虐待されて居

た。男は女を其の夫の手から離して遠いところに逃さうとした。丁度其の時に彼は小切手を持つて、銀行に使ひに行く事と成つた。彼は半ば無意識に其の數字を變じて、多額の金を受取つて、此れを旅費に宛てようとした。ところが女が町を離れるといふ日に、其の罪が露見してしまふ。それからあとは「銀の箱」の様に裁判の場がある。そして男は遂に入獄する事に成つた。彼は獄中で寂しい悲しい日を送つた。刑期が充ちて彼の出獄した時、彼は全く世間から棄てられてしまつて居るのを發見した。仕方無しに彼は證明書を偽造した。ところが此れが現はれて彼は其の爲めに再び罪に問はれる。再度の打撃に堪え兼ねた彼は遂に自殺してしまふ。

男は有爲の青年であつた。唯一時の發作にも等しい心の状態からして其の愛

する女のために金の工面をしようと思つた。其の好機は圖らずも彼の手中に落ちた。此の様な場合に犯された僅かの罪を以て、彼の一生を葬り去つてしまふのは、人道の上から見て不當であると辯護士は云ふ。けれども法律は此れを容れない。そして一人の青年を殺してしまつた。

—此の作の缺點はバランスのよく取れて居ない點にあると思ふ。更に孰れにせよ、男が法律上の罪を犯して居る事も明かである。此の點では「銀の箱」に現はれた議員の息子と貧民との罪に對する判官の態度の方が面白い對照を作し、且つバランスもよく取れて居る。更に此の作が悲劇として力強さの足りないのは、明かに主人公が弱者に過ぎるからである。主人公なり女主人公なりの性格が強ければ強い程、悲劇は其の持つ力の強さを増すを通例とする。ところが此の「公

正」の主人公は何等の強いところもない。そして運命に何の抗ふ事もせず、獅子の如くに死ぬべきところを鼠の如くに死んでしまつて居る。従つて彼の運命に對して起る同情は、弱者に對するものであつて、「眞の悲劇の主人公と云ふものに對してのものではない。或る評家はメースフィールドの「ナン」さへも眞の悲劇では無いと云ふが、此の方が「公正」よりも遙かに悲劇としての美はしさと強さを有して居ると自分には思はれる。但し此の作の中にも作家は中々優れたテクニクを現はして居る。殊に獄中の場の如きは優れた描寫である。第二幕第三場の主人公の獄室の場では、科白が一つも無い。唯場面と俳優の無言の藝のみで成つて居る。しかも此の作を通じての最も印象の深い場だと云へる。

「お人よし」(Pigeon)は「公正」とは全く相違したものである。お人よしの書家

を主人公として、社會改良論者を描いて居る作で、部分／＼に面白い所があるが、全體としては大して面白いものではないと思ふ。佛蘭西の若い放浪者は最もよい。但し科白に自然でないと思はれるところがある。第二幕の終りに各説を異にする社會改良論者が、お互ひに「我輩の説は……」と叫ぶところは面白い。更に最後の幕の終りは極めて氣持がよい。ガルスウチャーシイの作の終り方での一番ウイッテイなものと思ふ。

「逃亡者」(Fugitive)は千九百十三年即ち昨年の九月始めて倫敦で上演された。

此の作の現はさうとしたのは、夫妻間の趣味と感情の相違から生ずる不幸と、獨立すべき職業を持つて居ない若い女が、無慈悲な社會に一人で住む上には賣淫といふ事が避け難いものだといふ事である。

作中の女主人公をクレアと云ふ。彼女は夫と合はないで遂に家出をしてしまつた。夫が世話をして居た記者にマリリスといふ男がある。クレアは趣味の合ふ點から彼のところに生活の道を相談に行く。あとを追つて來た両親に向つてクレアは倦く迄も夫の許に戻るのを拒絶する。其所に其の夫も入つて來たが、クレアは頑として動かない。夫は彼女を離縁し、マリリスに對して訴訟を起すと云つて去る。マリリスはクレアを世話しようとした。けれども彼女は唯一人で世の中に出て行く。三ヶ月の後種々の職業に疲れたクレアはマリリスの家に戻つて來る。

彼女は單調な、しかもうるさい生活に堪えられなく成つたのである。此の時クレアは男のタイピストとして共同の生活を始めた。けれども此の生活も幸福ではなかつた。クレアの夫は訴訟を起した。其の結果若しクレアが男を棄てなければ、男は其の勤めて居る社からは免職され、且つ賠償金を拂ふために全然無一文と成らなければ成らない羽目に陥つた。クレアには到底男を零落させる事が出来ない。止むを得ず彼女は再び逃亡者フュジタイツと成る。彼女は遂に其の身體を賣るより外に、生きる途がなくなつたが、汚れた女の生活は其のよくするところでは無かつた。ダーヴィの競馬の日、或る料理屋のシャパールムに盛装して現はれたクレアは、其所の卓で毒を仰いで、此の世からの逃亡者と成つてしまふ。

自分は大變此の作が好きである。クレアと云ひ、其の夫と云ひ、両親と云ひ、又記者のマリリスと云ひ、どれも皆同情すべき人達許りである。そして又一面から云へば皆寂しい人達許りである。唯性格描寫の點から云つてマリリスのな

どは餘り明かでない。其れにも關はらず、自分は此の作に寂しい美しさを見るものである。此れは最も心地よい最後の場が、此の感じを強めて居るのに相違ない。

自分は此れの實演を見た時の日記を次ぎに記して置き度い。それは昨年九月廿七日の晩の事、ところはプリンスオプウェールズ座であつた。

「『逃亡者』」のような作は倫敦にはとても向かない。けれども實際いゝ作であり、且つ俳優も皆熱心に演じて居た。材はまるで遠ふが、人々が誰も同情を惹く事から、ハウプトマンの「寂しき人々」が聯想された。

始まりの幕は格別の事も無い。二幕目でクレアが、マウリスに唯災難を掛けるわけにはゆかないと云つて男の接吻を許すところは大層いゝ感じであつた。

けれども最もいゝのは最後の料理屋の場であつた。

それは白い卓布の掛つた小さなテーブルの並べられて、椰子の鉢植えなどの飾られた簡單なしかも美しい部屋であつた。競馬歸りの連中が奥の方では歌などを合唱し、中には角笛ホーンの音なども交つて聞えて来る。美しい部屋の中には何の粉粧をもしないクレアが、黒い美しい着物を着けて静かに現はれる。一人の若い男が来て彼女の卓に座つた。クレアと此の男との會話は面白かつた。男はクレアの眞にレディらしい態度に驚く。二人の盃には三鞭シャンペンが注がれた。クレアは此れを舉げていふ。

Le vin est tivé, il faut le boire!

遂にクレアは美しく死にたいものだなと云ひ始めたので、男は氣を換える

ためにドライブに行かうと此れを促がす。恰度給仕人の姿が見えなかつたので、彼は勘定を拂ひに彼方に立つて行く。其のあとに二人の男が来る。其の一人はクレアの傍に来て、翌日の晩此所で會食しようかと相談する。女は一言も答へない。男は相談が纏つた事として彼方に去つてしまふ。クレアは唯一ヶ所を見つめて居たが急に手を椅子の背に掛つて居た外套の隠しに入れて、小さい青色の瓶を取り出す。中の液體は三鞭の盃の中に注がれた。彼女は微笑んで盃を舉げる。そして喜びと恐れとに満ちた表情で、一息に此れを嚥み下してしまふ。彼女の唇には微笑の影が残つて居る。而かも其の身體は段々に椅子の上に倒れかゝつた。給仕人が丁度通り掛る。そして此の様を見、更に卓上の瓶を發見して顔色を變じる。前の若い男を始め、他の人々も其の場に来る。人々の沈黙の中

に美しい幕が終る。短かい場ではあるが自分には大變うれしかつた。俳優は皆うまかつたが、特に今夜の効果はクレアに扮したアイレネルックの優れた演技に依るものと云つて差支えない。彼女のすらりとした身體や、靜かな美しい顔は總べてクレアに最適のものであつた。彼女の誇張しない表情もよかつた。特に毒の盃を舉げた時の目が最も優れて居たと自分は思ふ。こゝにいふ女優を見る毎に、日本の女優が氣の毒に成る。」

「逃亡者」に次いで書かれたものに政治劇「暴徒」(Mob)がある。此れは本年の三月始めてマンチェスターのグェティ座に上せられた。

此の作のテーマは「争闘」に酷似して居る。唯「争闘」に資本家と勞働者が描かれたのに對して、後者には政治家が描かれて居る。或る正義人道に對して確い

信念を有して居る政治家が無定見な暴徒の凶手に斃されたといふ事が此の「暴徒」のモチヰヴである。「暴徒」は「争闘」の變形である。己の愛する國と妻子と其の理想との板挟みに成つたアイデアリストは中々強く描出されて居る。此の作の乾燥した空氣に美しい香を興えるために作家は主人公の小さい愛らしい娘を點出して効果を得て居る。最後の場で主人公が暴徒等に向つて「暴徒」と云ふものを説くところは中々面白い。暴徒といふものは頭腦も元氣も無いものだ。若し彼等が卑賤でないならば、世の中にさういふものはない。若し彼等が卑賤でないならば、世の中には卑怯といふものも無いことに成る。今の場合愛國心には二種ある。けれども暴徒は其の何れをも有して居ない。彼は續いて己れの理想の大きい事を語り、己れの信念の強い事を壯語して居る。主人公の飽く迄

も強いといふ事は、此の作の強味を増して居るものと思ふ。けれども自分は此れよりも前の「争闘」に見る二つの主張の對立の方を一層興味深く思ふものである。作家は此の「暴徒」にアフターマスとして、人々の迫害の中に、理想の爲めに死んだ主人公の記念像を見せようとした。けれども此れは技巧に過ぎ、且つ説明に墮した嫌ひがある。此の様な説明はつけないで置いた方が却つて印象が深くてよくはなかつたらうかと考へられる。

ガルスウチャーシイは英國の劇作家中最も進んで居る人である。彼は確かにバイヲニアである。今後問題劇の作家として英國第一の作家と成るのは彼であらう。彼の作物は俗受けはしないが、下らない喜劇の多い英國にあつては、最も重要な價を有するものである。従つて自分は此の多能な作家が、益々其の精力

ジョン ガルスウチーシイ

を劇作の方面に用ゐる事を切望して居るのである。

四六

ジョン
メースフィールド

John Masefield

英國の文人には不思議に多藝な人が多い。シウの様な飛び離れた人は別としても、ガルスウチャーシイ、ペンネット、チェスタトン、マックス、ピアボムなどそれぞれ多藝である。ジョン、メースフィールドも亦此の例に洩れず小説も書き、詩も作る。詩人としてのメースフィールドはシモンズやイエーツ等と並んで其の名が高い。寧ろ今のところ彼は劇作家といふよりも詩人と云つた方がよいかも知れない。劇作家としての彼は僅かに四つの作品を公けにしただけで、而かも其の中の二つは一幕の短かい物である。それにも關はらず、彼の「ナンの悲劇」は丁度「カヴレリア、ラスチカナ」一篇がマスカーニを世界の音楽家として認めさせた如くに、彼を英國一流の劇作家の列に加へしめて居る。自分は先づ他の一篇である「ポムペイ大帝の悲劇」(The Tragedy of Pompey the Great) から書き始めよ

う。題を見て誰も想像する様に、此の作はシーザーに敗れたポムペイ大帝の最後を描いたものである。作家は此の作の中に、ポムペイを正しい心を持った高潔な而かも静かな中に人を威壓する力を有した英雄として現はさうと試みた。けれども不幸にしてメイスフィールドの描寫は、或る場合此の英雄を負惜みの強い人、又一面には偽君子といふ様な感じを人に抱かせる缺點がある。作家の目的とするのは「英雄の死」であつたのに相違ない。最後の場でポムペイは、人々の危むのをも構はずに埃及に上陸して、忽ち奸刑のために殺されて居る。勿論彼は埃及が己れの敵であるといふ事を信じなかつたのである。

他人を疑はぬところ、且つ自己の所信に飽く迄も従ふところに、彼が英雄としての素質はあるとしても、此の場合の彼の行動の如きは、餘りに英雄として

不用意であり、且つ洞察の力を缺いて居る。侍臣が危むのに對して、彼は「異つ直ぐな心は安全なものだ」と答え、又他の場合に「道念を失ふのに比べれば、死などは取るに足りない」と云つて居る。

併し何れにせよ彼はつまらない最後を遂げた。尠くも此の作を通じての彼の態度は英雄らしくない。第一に彼は常に機會を捕え損ねて居る。彼の行動は羅馬の大帝のものでなく、寧ろ一兵卒のものである。作家がポムペイ大帝の偉大なる人格を見せ、且つ此の大人物が運命の力に敵せずして、自滅に近い最後を遂げて居る事から得やうとした悲劇は、此の作に於ては、稍計畫が外れた様に見える。ポムペイは餘りに運命と戦ふ事をしない。此れがために悲劇としてのバランスを失ひ、其の力も弱いものに成つて居る。

メイスフィールドは此の西暦紀元前五十年の事件を現代風に扱った。そしてポムペイ大帝始め總べての人を通例の男女として、物を云はせて居る。彼等は現今の俗語をも用ゐる。しかも時として、昔めいた詩的などころがある。

これはイデオロギの様な詩劇が、若しくは全然シェウの様な現代語を以て一貫した方がよくはなかつたらうかと思はれる。新舊二種の混合は、餘りうれしいものではない。恐らく此の作での最も優れたところは第一幕の始まりであらう。薄暮羅馬のポムペイの邸の中に、不思議な聲でポムペイを嘲笑する聲の、どこからともなく聞えて来て、此れを耳にした召使達が凶兆と感ずるところは、悲劇の始まりとして、深い感じを人の胸に抱かせるものである。

羅馬埃及の古英雄を描いたメイスフィールドの筆は「ナンの悲劇」(The Tragedy of Nan) に至つて、田舎娘の悲劇に轉じた。ポムペイ大帝の最後に比べては、取るに足りないナンの死が、悲劇として遙かにポムペイ大帝のものに優つて居るところをうれしく思ふ。

「悲劇の上乗なるものは「生の心」(heart of life)の反映である。此れは恐ろしい行爲から得る「怒り」と「喜び」の中に於てのみ赤裸々にして見る事を得る。」此の作の序文の冒頭にこゝにいふ事が書かれて居る。

「ナンの悲劇」は美と力とを持つた作である。一篇を通じての空氣は、極めて野趣があり、詩的で其の上ローマンティックである。此のローマンティックであるといふ事は、此の作を美しくさせる要素であると同時に、一面悲劇としての性質に反する傾きを起して居るものとも見られる。併し前の「ポムペイ大帝の悲劇」と比

べては、全く總べてに卓越して居る。其の筋が既に前者の如く散漫ではない。

ナンといふのは或る哀れな田舎娘の名である。彼女の父親は羊を盗んだ嫌疑から、到頭絞殺されてしまった。あとに残つたナンは其の叔父の家に寄寓して居る。彼女の生活はみぢめな且つ悲しいものであつた。けれども此の叔父の家に出入するデイックといふ青年を心に戀したナンは、此の戀を命として不愉快な日々を過して行つた。或る夜此の叔父の家に村の男女が集つて踊つた。此の夜ナンはデイックと戀に落ちた。けれどもナンの戀は果敢ないものであつた。此の事をデイックから聞いたナンの叔母は、ナンの父親の秘密を明かして、却つて自分の娘のジエニイをデイックの嫁とする事に決める。これを知つたナンの悲みはいふばかりない。ところが其の夜不意に村の役人が訪ねて来て、ナンの父親が

無實の罪に遇つた事の發見された旨を語り、代償として五十磅の金貨を置いて行く。此れと見た人々は驚き且つナンの幸福を羨んだが、ナンのみは、人間の命が五十磅を以て換えがたい事を云つて悲んで居る。併し此の事件に局面は一轉した。先きにナンを棄てたデイックは、再びナンのところに來て、先きの戀を新たにしようと試みる。ナンは男の心の醜さを底迄見抜く事が出來た。そして此の様な男のために蹂みにじられる女のためにと叫んで、洋刀ナイフを以て男を刺し、自分は近くの川に身を沈める決心で、暗い夜の中に驅け去つてしまふ。此の簡單な悲劇の中で、最も賞讃すべきは、ナンとデイックとの戀の場である。二人の言葉には粗朴な美しさがある。ナンの戀は強い熱を持つて居る。

作家は一人のガッファワーといふ老人を用ゐて、不思議な効果を得て居る。第三

幕に成つて少し此の老ガッファワーが用ゐられ過ぎて居る事は明瞭であるが、一面から云へば、此の老人のセンチメンタルな詩的な空漠とした言葉は、此の場の美しさを増して居るとも云ふ事が出来る。結局此れは觀る人の嗜好に依る問題である。ナンが此の老人と運命を語る場は、今迄のリリズムから確かにシンボリズムに轉じて居る。二人の言葉は詩的な美しさに彩られて居る。更に此の作で注意すべきは「川」若しくは「水」といふものが、多くのイメージーションを持つて居る事である。一體メイスフィールドは水を好む人らしい。其の詩や文にも、水や船を材としたものを多く見受けるが、此の作にあらはしたところは、餘程効果の多いものである。ナンと老ガッファワーとの美しい問答も總べて水に關係したものである。二人は金色の林檎の靜かに落ちる水や、海から潮の上る

川や、海からの不思議な魚のかゝる網などを語つて居る。そして特に潮の上る音を強くして、氣分を濃くして居る。ナンの死ぬ方法も亦、此の水に身を投じる事であつた。この様に水は極めて重要な働きをして居る。

メイスフィールドは平民の生活に興味を持つて居る人と思はれる。「ボムベイ大帝の悲劇」を例外として、他の取材は此の「ナンの悲劇」の如く、平民の生活に依る。彼は裏長屋の貧しい百姓家の喜びや、悲みや、怒りに多大の興味と注意とを拂つて、其所に人生を見出すのである。此等の小事件とも見られることが、彼に取つては、ボムベイの生死以上に重要な、且つ研究に價するものなのである。彼の筆には誇張がない。唯自由に思ふ儘を行つて居る人々の實生活を描寫して居るのである。但し其の中に詩人としてのイメージーションの加つて居る

のは云ふ迄もない事である。「ナン」の悲劇」では現實と此のイマジネーションがバランスを得た。「ボムベイ大帝の悲劇」では此れに缺けるところがある。此れがために一つでは成功し、一つでは失敗したのである。

メイスフィールドは此頃久しく劇作から遠ざかつて居るが、彼を知つて居る自分の友人の話では、日本の事物に多大の興味を拂ひ、殊に忠臣蔵を研究中だといふ事である。或ひは近い中に、其の翻案でも發表されるかも知れない。若し其の様な事があつたら、尠くも「大風」^{ダイフィン}よりも眞面目な日本劇が生れる事に成るだらうと想像される。

温和な、思慮に富んだ親しむべき此の作家が、如何に日本を觀じて居るかを見るのは嘸興味ある事であらう。

スタンレイハウトン

Stanley Houghton

スタンレイ、ハウトンと云ふ名前は、日本にまだあまり親しみを持つて居ない事であらう。彼はイギリスでの若い、有望な劇作家だったのである。自分は彼が既に過去の人物に成つた事を悼まずには居られない。彼は千九百十三年十二月十一日にマンチェスターの家で、卅二といふ若さで逝つてしまつた。優れた才を抱いた人の夭折は、東西を問はず悼惜に堪えないものである。

ハウトンはマンチェスターの人である。従つて彼の作品には其の郷土ランカシャー州の香ひが充ちて居る。

ハウトンの作品を通じて見られるのは、バーカー、ガルスウァーシイ等の諸家と同じくショウの影響を受けて居る事である。彼もショウ其他の諸家の如く、在來の因襲道德や偽善を敵として居る。併し彼の態度はショウの如く傳道風でな

い。且つ過激を避けて、總べてを冷やかに嘲笑するような態度を持して居る。此の點は彼の身體の不幸にして虛弱だつた事が原因して居るかも知れないと思はれる。更に其の作品にあらはれて居るのは、ショウと違つて貴族的な感じに富んで居る事である。此の點からして、彼の作品の或る物はワイルドを聯想させる。そして貴族的であると同時に理智的である。

彼の作中最も廣く知られて居るのは「ヒンドル、ウエークス」(Hindle Wakes)であらう。ヒンドルはランカシャー州にある街の名、ウエークスといふのは其の地方での休日で、丁度我國のお盆とでも云つた様なものである。

其の題名の示す如く、此の作中の事件はウエークスの間に起つて居るので、場所は勿論ヒンドルである。此の三幕物は次ぎの様な筋から成つて居る。

ある織布場の所有主デフコットの息子アランが、工女のファンニイといふのウエークスの間を、密かに或る海岸地シーサイドに「夫婦」としての生活をする。此の事が或る偶然の事からあらはれる。アランにはビアトリスといふ許婚がある。アランの父親即ちデフコットは偽善家の一人である。彼はアランにファンニイと結婚する事を道義上必要な事だと説いて、此れに従はせる。其の相談のためにファンニイと其の両親はアランの家に來る。其の前にビアトリスも父親と來て、アランと語る。アランはビアトリスを愛し、ビアトリスもアランを愛して居る。アランはファンニイを棄てビアトリスと結婚する事を希望して居る。けれどもビアトリスは、ファンニイの方が自分よりも優越な權利を持つて居る間は、其の希望に従ふわけにゆかないと答えて去る。やがてファンニイの家の三人が訪ねて來

る。アランは止むを得ずファンニイと結婚しようとした。ところがファンニイは總べての人の豫想に反して、其の乞ひを拒絶し、アランの様な男は夫とする價値がないと云ふ。己れの娘を裕福なチェフコットの家の嫁とする考へだつた母親は、此の意外の結果に大いに憤つた。其の結果ファンニイは歸るべき家を失ふ。此れを聞いたアランは眞に驚いて、其の將來を心配する。けれどもファンニイは昂然として、自分はランカシャーの娘だから、ランカシャーに織場のある間は自分の暮しに困るような事はないと云つて出て行つてしまふ。

筋と云へば此れだけであるが、何れの部分を取つて見ても、テクニクは至極要領を得て居る。強いて云へばビジネスライクに出来上つて居る。此の作は千九百十二年の六月始めて倫敦で演せられた。そしてファンニイの態度に就て、大

分各種の批評が起つた。其の翌年即ち千九百十三年の九月再びコート座に上場された。二度ともマンチェスターのゲエティ座の一座に依つて演せられたのである。自分の見たのは此の時であつた。九月廿九日の日記に此んなことが書いてある。

「『ヒンドルウェークス』は餘りに寂しい。寂しいといふのは仕草の妙い意味である。どうしても此の様なものを見るよりは、讀むのに適して居る。その上ランカシャーの方言を早口に云ふのであるから、聞き取り悪い事は非常である。始まりの幕が濟んだ時「ランカシャーの言葉は解りますか。」「どうもよく解りません。」といふ様な囁きが方々に起る。ファンニイに扮したムリエルプラットは中々よく演じて居たが、昂然とした性格を現はすところが、どこか不足に感せられ

た。デフコットのハーバート、ローマスは中々うまかつたが、老人の口調だけに最も聴取りにくかつた。アランのレオナルド・ミーディは何處か物足りず、ピアトリスのエヴェリン・ホープは美しくはあつたが、氣が入つて居ない様に見受けられた。總じて俳優の意氣の充實して居ない事が、此の事件に乏しい作を、餘計寂しく思はせて居た。どう考へても讀んだ方が遙かに面白味が多い。従つて今夜の見物は寧ろ失望に失つた。コート座では相變らず、開幕の知らせに銅鑼を鳴らす。食事の様だといふ聲がところ／＼に起る。」

ランカシャー人に書かれた此の作の地方色ローカルカラーといふものは、其の地方の人々に與える程の興味を倫敦人に與える事は出来ない。それ故此れは倫敦よりも、マンチエスターで演せられた時の方が成功するだらうと思はれる。

「ヘンドルウエークス」に次いで「新時代」(The Younger Generation)がある。此れは前者と同じく三幕物で、特に「親達のための喜劇」と辭つてある。此の作はヘンリイ・ケニヤンといふ紳士の一家を借りて「老人對青年」といふものを描いたものであるが、其の筋はこゝにいふ程のものではない。唯其の思想、行爲、總べてに青春の氣の満ちて居るヤンガー・ジェネレーションに對して、因襲的な頭から其の自由を束縛する親達若しくは老人達の權威オールド・タイといふものゝ、如何に愚かなものであるかを示したものであると云へば足りる。其の結果は「若き者の老いたるものに對する勝利」といふ事に成つて居る。此の思想の如きは全然シェーヴリアンである。特に此の作中では、老人の青年に對しての同情と理解の皆無といふ點が重きをなして居る。

更に其の作「獨立法」(Independent Means)を見る。此れは四幕の喜劇であるが作の中心と成つて居るのは、次ぎの様な事である。

或る資産家が株のために其の財産を危くし、次いで相場に失敗して、全く破産を遂げ、神経の高まつた結果頓死してしまふ。息子のエドガーといふのは、家運の傾き始める前に、シドニーと云ふ娘と結婚する。エドガーは世間知らずに育つた。従つて自身無能力なのにもかゝらず、一種貴族的なところがあつた。けれども其の家の破産と、父の死とは確然たる事實として、眼前に現はれた。彼等は住み慣れた家も棄て、新たに自活の道を講じなければ成らない。其の方法に就て新夫婦の間に争ひを生じて、遂に別れる事に成つた。別れると直ぐシドニーは戀意なリッチーといふ自動車屋のタイピストと成る。エドガーは自

働車を扱ふ以外に何も出来ない青年であるから、如何に探しても、よい職業がなく、到頭同じくリッチーの店に雇はれる事と成つた。こゝで彼はシドニーに紹介されて大いに驚く。エドガーは此れ迄シドニーが何所に居るか知らないで、唯毎週一磅宛の小爲替を其の母のために、シドニーから送つて来るのを受取つて、不審に思つて居たのである。此所に感情の強い場面が起る。そして遂にシドニーは再びエドガーの手に戻つて二人は相抱き乍ら未來の光明を互ひの胸に捕く。此の外に、エドガーの家の古い下女が、濠洲の叔父の遺産を贈られたために、急に巨萬の財産家と成つて、主人の家と位置を顛倒したり、リッチーがエドガーの父と其の死ぬ前に争論の結果絶交したり、彼がエドガーの一家に親切なのは、未亡人即ちエドガーの母と結婚したい希望を持つて居るためであるといふ様な

事がある。

フェミニストといふ點から、此の作のシドニーは前のファンニーと同じいと思われる。けれどもシドニーの方が遙かに心の美しさと温かさを持つて居る。彼女は總べての反對に屈せず、其の愛する夫をも棄て、所信を斷行し、時期の至るを待つて、夫の誇を傷けずに、其の手に還つた。其の最後のセンチメンタリズムは、今迄のシドニーに慣れて來た人を驚かすかも知れない。併し自分にはこれでこそ女らしい否人間らしい氣がする。此れだけの自覺と才能と同情のある女に愛されたエドガーは、近代劇に表はれた男の中の最も幸福なものと云つて差支えあるまい。唯此の作に就て皮肉を云へば、シドニーの様な女が、何故エドガーの様な男を愛したのか、不思議である。

ハUTTONは一幕物をも大分書いて居る。其の一つに「浮氣」(Fancy Free)がある。現今の英國の兩性間の道德のスタンダードといふものを、極めて愚なものとする事も、ハUTTONの思想中重要な部分を占めて居たらしい。此の思想の閃めきは、前の「ヒンドルウェークス」にも見えたが、此の「浮氣」にも見られる。前者で極めてロジカルな態度を取つた作家は、此の一幕物では、或る人々からは輕佻と見られる位に、輕い方法に依つて居る。

ある若い妻が主人の友人と驅落して、或るホテルに宿つて居る。妻の名をファンシーと云ふ。ところが其の夫も同じ宿に居た。スコットランドに旅行すると云つて、家を出た彼は、或る女と此のホテルに宿つて居た事がわかる。其の代りに彼は、友人から自分の妻の事件を知つた。自分達夫婦の間に、互ひの健康と快

樂の爲めには、自由に行動する事を得るといふ契約が、結婚當時結ばれて居たのにも關はらず、ファンシイは、夫が他の婦人と關係ある事を知つて、大いに憤る。併し夫の同伴した女も加つて、四人談合の結果、極めて容易な決着が附き、ファンシイは其の夫の手に戻つた。二人が退場したあとに残つた二人、即ち夫婦の友人と女とは對座して、其の顔を見合つた。女はファンシイの夫に話し掛けたといふのと全く同じ言葉で口を切る。こゝで幕に成る。作家はこの脚本のあとに、特に「此の脚本は最も眞面目に且つ上品に演せらるべし。茶番的の考へにて演すべからず。且つ美しき演技と、美しき衣裳と美しき舞臺とを要す。」と書いて居る。

其の「人民を信せよ」(Trust the People) は千九百十三年の二月倫敦に演せら

れたが、自分は不幸見物の機を失し、且つ本としては未だ出版されて居ないので、此所に此れに就て何とも云へないのは遺憾である。更に同じ年の九月アポロ座に其の新作「全治」(The Perfect Cure) が上せられたが、殆んど前例のない失敗に終つて、僅か四回興行されたやけで終つた。此の甚しい失敗が、強健でないハワトンの心身に非常な打撃と成つたのは疑ふ餘地がない。彼の死期を早めたのも亦恐らくは此のショックであつたらう。

いづれにせよ、彼の様な若い、且つ得がない劇作家が、未だ充分に其の才を伸ばすに至らないで、逝つたといふ事はイギリスの劇壇に取つて一大損失である。けれども彼の作は、其の時代の作品として長く鑑賞されるであらう。

こゝに蕪雜な一篇を草して、彼並びに彼の作品を紹介し、併せて其の早逝に

スタンレイ・ハットン

對して追悼の意を述べて置く。

40

ジョージ・バーナード・ショウ

George Bernard Shaw

種々の褒貶の間にシヨウは劇作家としての廿餘年を過して、遂に世界の劇作家と成つてしまつた。

シヨウが英國の近代劇に與えた効果の偉大な事は、現今の此の國の劇作家、ガルスウチャーシイとか、バーカーとか云ふ様な人達の作品が皆其の影響を見せて居るといふ事に依つても極めて明瞭な事だと思はれる。

人の知つて居る様に、シヨウは驚くべき多方面な人である。併し彼の最も成功したのは矢張り劇作家としてである。こゝには彼の劇作術及び彼の作品の特徴ともいふべきものゝ、一般を各項に別けて説明し、次いで其の各個の作品に就ての感想を述べたいと思ふ。

一、眞の人生の描寫

シヨウバーナードシヨウ

ショウの總べての作を通じて其の描き出さうとする所は「眞の人生」といふものである。彼は従來の戯曲、小説等にあらはされた人生を以て「偽りの人生」であるとした。

偽とは假面を被つて居るといふ意味である。似非といふ字のつくものである。彼は此の假面を剝いだ赤裸々の人生の姿を人々に示さうとして居る。従つて其の作品に見るところは、彼獨特の見解に従つたリアリズムである。

此のリアリズムに伴つて表はされる彼の作中の人生並びに其の中に動く人物は皆極めて複雑な性質を持つて居る。

二、ロマンスの嫌忌

ショウは従來の戯曲小説等に表はされたもの、中で、ロマンスといふものを

最も嫌つて居る。寧ろ敵視して居ると云つてもよい。彼の描く人物は従つて皆ロマンスに縁が遠い。偶にあれば「武器と人」中の娘ライナの如くに非ロマンスイズム傳道の道具に供せられて居る。

殊にロマンスチックな戀や戀を戀するといふ様な事はショウの最も嫌忌するところである。

三、因襲道德の嫌忌

ロマンスを嫌ふショウは又因襲といふものを忌んで居る。因襲的の道德は彼の敵である。従つて彼の作では因襲的な道德や、不自然な權威が皆最後には自然といふものに征服されて居る。自然には何物も敵する事が出来ない。此の點に於て一面其の作品には彼一流の道德モラルを發見するのである。

四、革命、傳道、破壊、建設、評論、

ショウは初期の作品即ち「ウーレン夫人の職業」武器と人等に於ては、社會革命者の態度を持って社會の赤裸々な姿を描出して、之れに對して鋭い批評を加へ、更に總べての因襲に固められた古い社會を打破して、新しいものを樹立しようとして居る。此の時代の作品には傳道プロパガンダといふ要素はまだ餘り多く無い。然るに其の中期より後期に掛けて彼の態度は哲學者のものに變じた。彼は其の哲學を彼の生命とした。従つて彼の作品は其の哲學の傳道書である。既に彼の作が傳道の性質を持つて居る以上、其の求めるところに改宗コンバージョンのあるのは云ふを俟たない。

舊を棄て、新を探り、空想をやめて事實に就き、因襲を脱して自然に還るのが

其の改宗の本旨である。

五、「笑ひ」

ショウ劇は其の性質がコミカル乃至トラギコミカルである。ショウのトラギ、コメディは其の性質に於て、ハウプトマン、ストリンドベルヒ等のものと似て居るとしても、其の技巧は全く相違して居る。何故ならば其の性質の如何を問はずして外形に表はれたショウの描寫は如何にもコミカルである。其れ故彼の作品には「笑ひ」の分量が極めて多い。そして其の内容に従つて見る人乃至讀む人は面白く、或ひは苦しく、若しくは悲しく笑はされるのを常とする。彼の作品が複雑な性質を持つて居ると同様に、此の「笑ひ」も亦極めて多様である。

六、機智と皮肉

ジョウの天分は機智ウイットにある。彼の鋭く巧みな皮肉や諷刺は皆其の機智の變形と見れば見られる。ジョン、バルマーが其の近著「劇場の未來」中にジョウの作中不朽の價を有するものは其の機智にあると云つたのは全く一理ある言葉であると思ふ。

彼の皮肉と諷刺は多くの場合諧謔ハイゼツの感じの加つて居るところから、鋭い中にも一種の快感を覺えるのを例とする。けれども時として其の餘りに無作法に過ぎた場合には往々人に反感を抱かせる。

ジョウが人々に喜ばれる理由は多く此の天性の機智に依ると同時に、其の反對者に對して惡感を興えるのも亦此の機智にある。彼の皮肉や諷刺は其のナイーヴな時に最も成功する。

機智の妄用は「アンドロクラスと獅子」「グレート、キャセリン」等に見られる。けれども徒らに乾燥な近代劇中ジョウの此の機智は得難い寶玉であると思つて居る。

更に彼の機智は時としてあまりに軽いために其の作を輕佻なものと人に感せしめるかも知れない。併し決して彼は浮薄でも輕佻でもない。彼の作は眞面目である。彼の機智は乾燥を防ぐ道具である。フランスの批評家ハーモンが此の機智に伴ふファースを評して「讀者又は觀者の嚙下を便にせんがために塗られた、苦い丸藥の周圍の蜜」であると云つたのは、よく之れを解した言葉である。彼の機智は各種の形と成つて表はれるが、飽く迄も作者の理智的な條を躍動させて居る事だけは常に同じである。

七、コミカルな感じを如何にして得るか、

ショーヴ劇の外形がコミカルだと自分は前に書いた。此の項には如何な技巧に依つて、此の作家が獨特のコミカリテイを得て居るかに就て記し度い。勿論彼の機智が總べての源泉と成つて居るのではあるが、之れを更に類別すれば、第一は劇中の人物の機智に富んだ對話、第二は劇中人物の性格、地位等の極端な對比、第三は劇中人物の可笑味に富んだ動作、第四は或る特種人物の有する特種思想、第五は言葉の誇張である。

機智に富んだ對話は一々例を擧げる必要のない位、ショーヴ劇の中に満ちて居る。劇中人物の極端な對比は「武器と人」中のブルンチュリとライナの如きは其の一例である。劇中人物の可笑味に富んだ動作は又自然と故意の二つに別ける

事を得るが、自然の滑稽の方が可笑味の強い事は勿論である。前者の例にバーグスとかマッコーマス等のものがあり、後者の例にマッコーマスやブーンの口眞似するドリー、モレルの態度口調等を眞似るレキシイ等のものがある。

或る特種の人物の有する特種思想と云ふのは、例せば或る特種の職業に従つて居る人の他の職業若しくは己れの職業に對しての特種の見解の様なものといふ。例えば「キャンディダ」中の資本家バーグスの牧師といふ職業に對し、「武器と人」中のブルンチュリの軍人といふ職業に對して抱く見解等である。

言葉の誇張は特に説明する迄もない。

八、思想が主たる事

ショーヴ劇の中心は思想にある。彼の作は時として思想を主とし過ぎるがため

に、筋の運びの極めて突飛な事がある。此れも亦前項のコミカリティを助けて居ると云へば云へる。筋の突飛若しくは事件の突飛といふのは「キャプテン、プラスバウンドの改宗」の第二幕や「人と超人」の第三幕を讀んだ人の何れも首肯する所であらう。従つてジョウ劇では劇中の人物の奇遇と云ふ様な事はのべつに起つて居る。

九、各種の職業と此れに伴ふ代表的思想

ジョウの作は其のスフィアが極めて廣い。殆んど社會萬般の事物は皆其の作の材料と成つて居ると云つても過言でない。彼の描いた各種の職業中最も度々用ゐられるものに、牧師、軍人、醫師、法律家、資本家、藝術家等がある。彼等の多くは殆んど其の職業といふもろゝ代表者とも見る事が出来よう。

モレル、ランキン、アンダーソン、サミュエルガードナー其他は皆牧師といふタイプに屬し、同様に軍人にサーギアスルーフィア、其他、醫師にバラモア並びに「醫師の板挟み」に表はされた多數の醫師があり、法律家にはマッコーマス、ホーキンス、ブーン、資本家にサルトリアス、ウォーレン夫人、バーゲス等の甚しい例があり、藝術家にマーチバンク、アポロドラステューブダット等がある。更に浮浪人ともいふべきタイプには「人と超人」や「キャプテンプラスバウンドの改宗」に出る多勢がある。此れに伴つてこゝに各種の思想が現はれる。即ちキャピタリズム、ソシアリズム、ヒロイズムなどが最も躍動する。

十、國民性の描寫

ジョウは又種々の國民性を其の作に寫した。

「ジョンブルの他の島」に出る数人の愛蘭人、「キャプテンプラスバウンドの改宗」や「人と超人」に出るアメリカ人「グレートキャセリン」に出る露西亞人「ファンニイの處女作」に出るフランス人といふ様なものが其の例であるが、此等は殆んど論ずるに足りない。シヨウの作中のオブジェクトと成つて居るのは常に英蘭人である。シヨウに描かれた英蘭人は偽善の心の強く物事を飽く迄も主義に依つて根氣よく續ける人間である。狐疑の心を抱いて、諧謔のセンスのない人間である。

其他國籍や、時代を超越したものに「シーザーとクレオパトラ」「アンドロクラスと獅子」に出る人々がある。此等は皆近代人として描かれて居る。

十一、特種の英雄

シヨウは古來の英雄といふものを革新する目的で「シーザーとクレオパトラ」のシーザーを描いたが、シヨウ劇には彼の英雄といふものが澤山ある。此等シェーヴィアンの英雄は男女を問はず、皆發達した自意識を有し、自ら自己を批評し、開拓し、己れの信に従つて狐疑なく進んで「眞の生活」を營むものである。此等の特種の英雄はシヨウ劇の中心人物と成り、彼等の思想が劇其の物の中心思想と成つて、總べてのものは此の周圍を取り圍んで進んで行く。

シヨウが己れの思ふところを發表する際には、多く此等の英雄の口を借りて居る。そして彼等の言葉は作家特有の機智に包まれて居るのである。

十二、兩性の相違

シヨウ劇で最も著るしい事實は、女性に馬鹿氣た者の一人も居ないことであら

う。男性の方には幾多の馬鹿が発見される上に、「武器と人」のブルンチェリとか「人と超人」のタンナーとか「戀を漁る人」のチャーテリス「悪魔の弟子」のディック「キャンディダ」のモレル、「バルバラ大佐」のアンダーシャフトといふ様な人物を除いては、各人の個性といふものが極めて無價値で、此等は寧ろ或る階級、職業等の空気を表はす役として描かれて居る。此れに反して女性の方は誰も皆總べて其の個性に従つて活躍して居る。

十三、老人對青年

舊を棄て、新を探るのがショウ劇の傳道中重要な本旨の一つである以上ショウ劇に於て老人對青年の戰の起るのは當然の事である。ショウに書かれる老人乃至年長者は、其の階級職業等に依つて多少の相違はあるとしても、皆何れも頑固

で、因襲に固められた頭を持ち、青年に對する同情と理解が皆無で、しかも年長者としての無効な權威を保たうとして居る。其の結果はいつも若いものゝ爲めに敗られる。唯「ユリ、ネワ、キャン、テル」のクランドン夫人の如きは例外である。

十四 生の力

生の力といふ自然の力はショウの哲學中特殊な且つ重要なものである。ショウの作品の多くは皆此の生の力といふものに出發して居る。此の生の力を材とした作で最も知られて居るのが「人と超人」である。此の生の力に就ては「人と超人」の部分が述べてみたいと思ふ。

十五、特種の哲學者

メーテルリンクの戯曲を読んだ人は、誰も其の作中に表はれる人生の先覺者

若しくは指導者ともいふべき老人の居るのに気がつくであらう。「タンタジールの死」の「アグロヴァル」「ペレアとメリサンド」の老王アーケル「モンナワナ」のマルコなどが此れである。メーテルリンクの此等の人々に比すべきものが、シヨウの作にも時々現はれる。

唯メーテルリンクの此等の人々が皆暗い思想を持つて居るのに反して、シヨウのものは何れも樂天的な考へを有して居る。更に面白い事は此等の哲學者は皆極く普通の教育の無い人間の中に發見される。「ユー、ネワー、キャン、テル」の給仕人「結婚」の八百屋「人と超人」の運轉手、浮浪人の首領メンドザ等が其の例である。要するに此等の哲學者は世故に長じたといふ點を第一の要素として、劇中の中心人物と相俟つて活動し、時としては中心人物よりも重要な位置を占める事さへある。

る事さへある。

十六、アイロニカルな終局

大詰のアイロニカルな事もシヨウ劇の大なる特長であらう。彼の作ではキャタストロフが最後に現はれる事があり、又は眞のキャタストロフは最後迄現はれず即ち劇は其の明かな終局に至らないで最後の幕が終つて居るのがある。後者の例としては特に「結婚」などが挙げられる資格を備へて居る。但し其の何れを問はず、終局のアイロニカルな事は同様である。「ユー、ネワー、キャン、テル」「運命の人」「結婚」其他皆此の例に洩れない。

十七、死といふ事の尠き事

喜劇にせよ、悲劇にせよ、シヨウの作では人の死といふ事が實に稀である。イ

ブセンの好んだ短銃などは全然シウには用ゐられて居ない。舞臺の上での臨終と云つては「醫師の板挟み」中のルイスデブダットの例があるだけである。此れとてもシウ一流の悲劇でハーモンの云つた「笑ひのヴェールを透しての悲劇」に近い。但し人の死といふ事はまだ「シーザーとクレオパトラ」の中には起つて居るが、此れは格別痛切な感じを人に與えるものでないから此所には數へない。

十八、序文とト書

シウの作が本として發行される場合には、いつも驚くべき長い序文が附く。此等の序文は時として、其の戯曲以上の重要な價を有して居ると云はれて居る。特にチェスタトンの如きは其の價値に重きを置いて居る。

又シウのト書の精密なものも人の知る所であらう。其の敘述が所謂ト書の方法

に依らないで、普通の文章體に成つて居るのも注意を惹く。實際彼のト書は長く精しい。劇中の人物の一舉手一投足迄總べて委しい注文がされて居る。而かも其の形容其他は此の作家の機智を縦横に表はしたものである。

十九、幕と場 アクト シーン

「結婚」以前の諸作には場シーンといふものが無く、總べて幕アクトに分けられて居る。此れもシウ劇の一特色であらう。更に「醫師の板挟み」あたりからは、各幕の長短なごが極めて無頓着に扱はれ始め、「結婚」の如きは非常な長さの一幕物と成つて居る。

以上でシウ劇の技巧と思想に關しての一般に就いては擧筆する。以上の分類に就てはフランスのアウグスタンハーモンの書に負ふ所が多い。特に二三の

事項に關しては、此の書に依つて教えられたところがある。ハーモンはショウ劇の佛譯者で、此の著書に收められたところは巴里大學の自由講座で彼の述べた講義の要領だといふ事である。

ショウの初期の作は愉快劇、不愉快劇の二種で、出版の順序としては、不愉快劇の方が先きに成つて居る。

愉快劇と不愉快劇の相違が先づ人の興味を惹く。實際普通の意味で單に愉快と云ひ、不愉快と云ふ場合に「ウオーレン夫人の職業」を除いてあとの六つは殆んど同じ様に感ぜられる。併し仔細に此れを見れば、愉快劇に書かれたのは社會の愚^{フタコ}であり、不愉快劇に現はされたのは社會の恐^{ホロ}であるといふレネーディーコンの評語の當つて居るのが發見される。自分は先づ不愉快劇に收められたもの

から書き始める。

「貧民長屋」(Widowers' Houses) はショウの世に出した最初の作であるといふ以外に、大して面白い事は無い様に思ふ。作としては貧民窟のランドローディズムと此れを中心とした戀の葛藤を描いたものである。

併し此の作が従來の英國の戯曲に對しての革命と成つたのは、女主人公のブロンシユの性格と行爲とであつたと云ふ。多くの十九世紀の戯曲に慣れた觀客の目には、今日何の不思議も無いブロンシユも一種の怪物^{モンスター}の如くに映じたのであらう。更にテクニクから云つても、中々整つて居る。

「戀を漁る人」(The Philanderer) はトビカル、コメデイと名附けられて居る。トビカルといふ字の附いて居る以上、此れの書かれてから既に十何年を経た今日

では其の當時新しく新らしくとつとめた所程、古く思はれるのは當然の事で、作家自身も亦豫期して居た事だらうと思ふ。然しテクニクから云へば、極めて整つて居る。第一に少しも無理がなくて筋が運ばれて居る。此の作は「戀を漁る人」のチャーテリスといふ男が主人公に成つて居るが、此れは極めて理智的な人間で、シヨウ劇に出る男性中での最も優れた一人である。彼は倦く迄も己れの信じる所を行ふ、小氣味のよい男である。

此の作はトピカルな事以外に幾多の注意すべき點を持つて居る。第一には極端なアイデアリズムの危険が書かれた。此の作中の重要な人物の一人に若い醫師が居る。彼は熱心な研究の結果或る特種の病氣を發見した。然るに不幸にして、自分の戀人の父に當る人が、此の病に犯されて居ると診斷して、其の壽命を

さへ限る。ところが此の發見の誤りだつたといふ事が、他の醫師の研究に依つて證明されてしまふ。此れを知つた此の醫師は、其の戀人の父の生命の助かつたのを祝はずに、己れの學術上の名譽の地に塗れたのに甚しい失望をする。人の生命と、單なる學問上の野心との輕重をさへ忘れた此の醫師の行動と心理とは最も滑稽であり、又同時に最も重要視さるべきものである。

次ぎには喜ばしい中に悲みを見附けようとする、ひねくれたシヨウの特性が覗はれる。

最後に「新らしい女」といふ様な事を除いて、愛と結婚との問題が引き出されて居る。女主人公の一人のグレースがチャーテリスに向つて自分は自分が餘りに愛して居る男とは結婚しない。若しすれば男に非常な利益を與えてしまふわ

けに成るからといふ意味の言葉を洩らして居るが、チャーテリスは此れに對して哲學者と人間との此の問題に對しての争いは甚しいが、哲學者はあなたを正しいと云ふと答えて居る。

「ウォレン夫人の職業」(Mrs. Warren's Profession) はショウの諸作を通じての傑作である。ショウの喜悲劇は普通喜の分量の方が強いのに對して、此の作は其の逆である。ウォレンの母子はどうしても悲しい終局に陥らなければ成らない様な、全然相反した性格と思想を持つて居る。此の性格並びに思想の反し方が、其の發展に連れて、段々と喰ひ違つて行き、遂に不可抗の破裂に至つて居るために、此の作は悲劇としての要素を明かに有して居ると云ふ事が出来る。

ウォレン夫人は大陸に娼家を營んで、其の利益に依つて娘に高等な教育を授

ける。娘のヴィヴィーは出所を知らない金を使つて、安樂な生活を送つて居た。ところが遂に事實は總べて明白に成る。其の母の賤しい職業を知つたヴィヴィーは斷然此れと別れる。母の權威といふ様なものは、冷かな娘には何の反響をも與えない。彼女は母も棄て、戀人をも棄て、自活の道に入る。最後の場で「死ぬまで悪い事をしぬいて、榮耀をしてやる」といふ母の言葉に「妾なら一つの生活をしながら、別のを信じるといふ様な事はしなかつたでしょう」と答へたヴィヴィーは明かにショウの英雄である。壯士其居では悲劇と云ふと徒らに人間が多勢死ぬが、悲劇といふものにそう人間の生きたり死んだりする必要はない。處世の考の相違のために親子が他人と成るのなどは立派な悲劇である。悲劇としての此の作は前に書いた様に其の結末が不可抗な事件の推移に依つて起つた

ものであるために、其の根ざしが深いが、其れ以外に此の作は「婦人と社會」の問題を論じて居る。婦人が經濟上の獨立を得ない限り、「賣淫」と云ふものは當然起るべき現象だといふのが其の重要な本旨である。此の點はガルスウチャーシイの「逃亡者」に似通つて居る。此の婦人問題以外に、もう一つ注意すべきは「功利的の戀愛」である。更に云へば「キャピタリズムの害」といふものも加つて居る。

此の作は英國では公演を禁止されて居る。唯舞臺協會が私演として、此れを上場した。それは千九百二年の一月である。其の當時の寫眞を見ると、人々の扮裝其他が一昔前の感じを人に起させるのにも關らず、其の脚本が今日猶新らしさを有して居るのは、確かにその優れて居る事を證據立てるもので、且つ作家の非凡を示して居るものであると思ふ。

愉快劇の第一は「武器と人」(Arms and The Man)である。

ショウは此の作の世界をブルガリアとして居るが、此れに表はされた人間はどれも皆所謂歐洲の文明人である。

ショウの作中此の位滑稽に包まれた皮肉に充ちたものはない。殊に其れが極めて露骨に描かれて居るから、非シェーヴィアンの人達に對しては最も嫌忌される要素を持つて居るとも云へる。何れにせよ空想を棄て、事實に就くシェーヴィアニズムが遺憾なく活動して居る作である。愛國も文明も亦戀愛も皆ショウの筆に依つて赤裸々にされて居る。

作の女主人公ライーナは極めてローマンティックな戀を夢む女であつた。ところが或る夜ブルガリア兵に追跡された一人のセルヴィア兵が逃場を失つた餘り、

彼女の室に攀ち上つて此所に危きを逃れて以来、ローマンズの世界は崩れ始めた。此の兵士はセルヴィアの傭兵で瑞西人であつた。此の瑞西人ブルンチェリは事實の世界に住む人である。ライーナは漸くローマンズの世界を離れて遂に事實に面して生活して居るブルンチェリの手を探るに至る。ライーナの愛人であつたサーギアスも遂に愛國の假面を棄て、戦争が愛國者や英雄の夢に過ぎないと思つて居る。

「武器と人」の次に「キャンディダ」(Candida)がある。

此れはイブセンの「人形の家」の脱化したものだと思はれる重要な問題劇である。唯「人形の家」で主題と成つて居るのが、婦人の自覺と開放とであるのに對して、此の「キャンディダ」では夫婦といふものゝ關係が此れに代つて居る。「キャン

ディダ」は「武器と人」の様な改宗の對話ではない。そして最後の幕の終りの場が全然一篇の主と成つて居るために、其の前の二幕は實演の場合寧ろ物足りない感じがされる恐れがあると思ふ。

キャンディダといふのは女主人公の名前である。

彼女の夫は健全な活動的な説教師である。此の夫婦は平靜な愉快な生活を續けて居た。ところが二人の間に年少な詩人ユーージェネーといふものが入る。彼は心身共に不健全で且つ奔放な感情を持つた青年である。此の青年はキャンディダを戀し始める。此の事實はキャンディダの夫に告げられて遂に二人は其の身體を女の撰ぶのに任せる事と成る。結局キャンディダは夫の手に戻り、ユーージェネーは夜の中にまぎれ去つてしまふ。云ふ迄もなく興味を中心と成るのはキャンディ

ダの心理である。ショウは此の作を神秘ミステリーと名づけて居る。恐らく此れが最後の夫婦間に起る一種ミステリアスな感情を描いたものだからであらう。キャンディタは自分を「二人の中の弱い方」に與えやうと云つた。此の言葉の齷らす興味に就てはチェストンが精細な批評して居る。「二人の中の弱い方」と云つて實は「強い方」の夫を取つたキャンディダは明かに夫婦の間に起る不思議な感情に支配された。夫婦は一體である。一人／＼に別れては其の力を著るしく減じる。従つて二人の別れようとする時、夫は妻を弱いものと思ひ、同様に妻は夫を微力なものと思ふ。此の考へが最後の時にキャンディダの心に閃いた、めに事實「強い」夫を「弱い」と呼んだ。

ハーモンはキャンディダの最後の行爲を唯の利己主義からであるとして居る

が、此れは單なる利己の觀念のみに依つたものとは見たくない。更に夫婦の自覺といふ事以外に、空想に生きる青年を棄て、事實に生きる夫を取つたキャンディダはシェーヴィアンである。

「運命の人」(The Man of Destiny) に成つて、ショウは始めて歴史上の人物を其の主人公とした。此れはナポレオンのスケッチである。ショウ獨特の想像力とアイロニイとは最もよく此の作に現はされて居る。青年士官としてのナポレオンと不思議な婦人との伊太利の田舎の旅籠屋での會合は、倦く迄もアイロニカルである。意志の強固な、明快な判断力を有した、活動的なナポレオンも、愛蘭人を母とする不思議な婦人を翻弄して、翻弄された形である。此の婦人はナポレオンの偉大な力を解釋して「唯自己を信ずる事」だと云つて居る。彼女は明かに

ナポレオンを知つて居る。そしてナポレオンの伴らうとする點に對しては狐疑なく嘲笑して居る。併し自分の最も興味を持つのは此の作で最後にナポレオンの語る「英蘭人」^{イングリッシュマン}といふものである。ナポレオンの見た「英蘭人」は即ちショウの見た「英蘭人」と成る。

ナポレオンは「英蘭人」をシヨップキーパーの國民だと云つて居る。けれども「英蘭人」といふものが、世界の主と成るべき一種不思議な力を有して居る事を認めて居る。

「凡そ世界には上中下の三種の人民がある。上と下とは狐疑と道德とを持つて居ない點に於て同様である。下は道德以下にあり、上は以上にある。自分は其の何れをも恐れない。……唯危険なのは中等のだ。彼等は智識と目的を持つて

居る。けれども彼等にも亦弱點はある。それは狐疑の心の極めて強いために手も足も道德と體面とで縛られて居る。……英蘭人は一種離れた種族だ。總べての英蘭人は狐疑を持たない程低くなく、さりどて又専制から自由に成る程高くない。併し總べての英蘭人は一種不思議な、世界の主と成る力を天性備へて居るのだ。何か欲しい物のある時彼等は決して口に出さない。そして唯自分の欲しいものを持つて居る者を征服する事が、其の道德的且つ宗教的の義務であるといふ強い信念——此れがどうして起るのかは誰も知らないが——が胸中に浮ぶ迄辛棒強く待つて居る。……自由と國家の獨立との大選手として、彼等は世界の半分を征服し合併する。そして之れを殖民と稱へて居る。又マンチエスター製の粗惡な商品に、新しい市場の必要な時は、彼等は先づ土人に平和の福

音を伝えるために、傳道師を送る。土人が傳道師を殺す。すると彼等はキリスト教の防衛の爲めに武器を手にして、其のために戦ひ、其のために征服する。そして天からの報いとして市場を手にする。……………英蘭人は總べて物事を主義に従つて行ふ。其の戦ふ時は愛國の主義に據り、人を奪掠する時はビジネスの主義に従ひ……………尊王の主義に依つて國王を助け、共和の主義に依つて其の首を刎ねる……………」此れがナポレオンの言葉の要領である。

「ユー、ネヴー、キャン、テル」(You Never Can Tell)は嘗て「廿世紀」といふ題で、東京で演せられた事がある。「廿世紀」は餘り苦しいから、原題の儘を用ゐる。

前の「戀を漁る人」がイブセニズムの流行し始めた當時の事を書いたものである様に、此の作は廿世紀といふものゝ、珍らしい時代に書かれたもので、特に

新舊の兩思想の衝突と、所謂廿世紀的の若い男女の戀が多くの變化と波瀾とを以て書かれて居る。廿世紀といふものが珍らしかつた當時のもの——事實之れはまだ十九世紀の中に書かれたのである——と云へば昔のものだとも思はれるであらうが、實際は今日から見ても、新味と面白味とに富んだ作である。「兩性の決闘」といふものが特に書かれたのは此の作が始めであると思ふ。辯護士のブーンは驚くべき人間である。コンモンファイロソファアの一人たる老給仕人の登場が此の幕の空氣に與える影響は非常なものである。

ショウの次ぎの戯曲集は「清教徒のための戯曲」と呼ばれる。其の第一の「悪魔の弟子」(The Devil's Disciple)は此の作家の傑作の一つである。

君の爲め、國の爲め、乃至は戀の爲めには、古來多くの人が皆一身を犠牲にし

た。志士と云ひ、國士と云ひ、彼等は皆喜んで死に就いた。そこにヒロイズムといふものがある。けれども此の「悪魔の弟子」にショウの發表したヒロイズムは何所から來るのか出所の知れない一つの不思議な力である。君とか、國とか、名譽とかいふ様な對照物が無い。唯自分自身どうしてもそうしなければならぬ一種不可抗の感じである。悪魔の弟子と呼ばれた男が或る危急の場合に、他人の身代りと成つて捕へられて、死に就かうとする。其の際に彼の胸中に名譽とか利害とかいふ觀念はない。唯其の場合他人の首に繩を掛ける事が彼には出来なかつたのである。此れが出所の知れないヒロイズムの作用で、彼は唯己れが行爲に一種の興味と満足感を覺えたのであらう。そして結果としては、始め悪魔の弟子と呼ばれたショウの新人の一人リチャードダグジョンが作中での英雄と變

じて終つて居る。時代としては亞米利加の獨立當時が用ゐられ、場所はニューヨークシャーである。

第一幕の終りに英軍が進入して、叛徒を捕へるといふ事が知れた時、ディタの家に集つた人々が牧師を始めとして狼狽して去り、哀れなエミーといふ娘だけが其所に残される。此れを見た悪魔の弟子の言葉は、ショウのキリスト教に對しての言葉中、最も強い且つ機を得たものだと思つて居る。彼が絞首臺上での牧師との問答は作家の缺點の方を餘計に表はして居るが、あと二分といふ時に迫つて救ひの來るところは如何にも獨特の技巧である。

牧師アンダーソンがリチャードに語つた「人間が天職を知るのは其の試練の時にある」といふのもショウの思想の一つである。

「シーザーとクレオパトラ」(Caesar and Cleopatra) に至つて、作家は眞に其の獨特の手腕を見せて居る。

ショウは近代人として、又英雄といふものに對する近代的の觀念に従つた英雄としてのシーザーを此の作中に活動させた。其他クレオパトラと云ひブリタニヤと云ひ、皆明かに近代人である。此のシーザーに見るのはショウの定義に従つた「英雄」である。従つてショウの云ふ如く、飽く迄も人間的である。自分は幸にして此の劇が英國の名優ファブス、ロバートソンに演せられるのを見た。シーザーは一種の哲學者である。第一に彼は冷靜で、そして大量で果斷である。名酒の代りにバーレーウチャーターを望んだ彼は極めて簡粗であると同時に又謙謹に富んで居る。場合に依つて彼は全く武人であるが、其の總べてを通じての

性格は平民的な哲學者のものに近い。スフィンタスの前での獨白に其の面目は現はれて居る。

多くのショウの英雄の様に此のシーザーも亦己れの信ずる所を行ふ人である。彼の生命は活動にある。彼は無事の死よりも殺される事を望んで居る。また彼は社會の總べての事件を、アートと見て居る人である。アポロドラスが羅馬自身はアートを産まないと云つたのに對して、彼は「平和はアートではないか。戦争もアートではないか……」と云つて居る。

クレオパトラは時として非常に狡猾に時として飽く迄雅氣に充ちて動いて居るが、其の生命は戀にある。

此の「シーザーとクレオパトラ」は五幕は長いもので、作家は此れに歴史と銘

を打つて居る。

「キャプテン、ブラズバウンドの改宗」(Captain Brassbound's Conversion)は最も愉快なものである。芝居はモロッコに起る。そして題名の様な主人公の改宗に終つて居る。

此の作の主人公は其の母親が、ホワード卿といふ検事長の無慈悲な行爲から、狂死した事を深く心に銘じて、其の仇を討たうと念じて居る。此の二人は叔父と甥の關係を持つて居るのである。然し主人公は英國を出奔してモロッコに住み、無頼漢の首領と成り、船長をつとめ、又旅行者の案内などを引受けて居る。ところがこゝに彼のために意外な好機が来た。それは仇のホワード卿が、其の義妹に當るレディウェインフリートといふ旅行家とモロッコに来たのである。レ

ディウェインフリートは内地の山を探る事を欲して、ブラズバウンドは手下と共に案内の役をつとめる事と成つた。彼は此の山の中で叔父を捕へて、キリスト教徒を敵視する土民に賣らうと圖つた。けれども此の計畫の成就に先つてブラズバウンドはレディウェインフリードに説服されて、復仇の考へを放棄する。復仇といふ事が叔父甥の關係といふ様な道徳上の考へから止められたのではない。一人の活動の出来る立派な男として此の様な事をするのが、餘りにつまらない事だといふ事が解つたからである。更に此れが無益の事だといふ事をも悟つたからである。彼は此の様な復仇を目的として居た生活が、人間の生活として全く無意義なものである事を悟つた。

レディウェインフリートは形容しがたい面白い性格を持つて居る。彼女は戀を

知らない。戀を知らないのを以て人を使ふ秘訣として居る。彼女の言葉にブラズバウンドは新しい生活の道を求め得た。既に方向を探し得た彼は、確かな進路の指導者を欲した。彼の心には此のレディに對しての戀が起る。彼は最も單純に且つ熱心にそれを語つて結婚を迫る。

レディは此の時全く結婚の意志の無いのにも關はらず、男の熱心な言葉に自失して手を差出す。彼女が手を伸べた時砲聲が轟く。ブラズバウンドの船の出帆の合圖である。彼は此れがために機會を失つた。而かも心からの感謝を殘して此の場を去り、レディは此れがために危機を免れる事を得た。

小説家としてのショウは不成功に終つたが、其の中の「キャシエルバイロンの職業」を自身脚色したものに「アドミラブルバッシュビル」(The Admirable Bashville)

がある。此れはショウの唯一のブランクヴァースの作であるといふ事と、其の書き方がブランクヴァースといふものを馬鹿にしたものだといふ事以外に大した問題は無い作だと思ふ。そして最もローマンティックなものである。唯讀んで居て馬鹿氣た感じがする。顔も着物も心も現代的の人間が言葉だけポストエリザベサンともいふ様なところが、巫山戯て居る。「悪魔の弟子」で人間は己れの天職を最後の試練の來る迄、語らないものだと言つたショウは、此の作の中でキャシエルバイロンの言葉として、運命が我々の「出来る仕事」を與えるので、「望む仕事」を與えるのではないと云ふ意味を語つて居る。此の次ぎの作として、自分の筆は「人と超人」(Man and Superman)に就て書かなければ成らない。此れは多くの人からショウの最大の作と云はれて居るものである。此の作に表はれた人

物は皆歐洲人ではあるが、ショウの説く「生の力」(Life force)といふものは、其の是非は別として、人類一般に涉つての思想であるから、尠くも今迄の彼の諸作よりも廣いスコープを有して居ると云ふ事が出来る。此れは「喜劇及び哲學」と名附けられた。けれども公平に見て此の作は劇としては失敗して居る。それにも關はず此の作が重要なのは、全く此れに現はれた彼の哲學の興味あるためである。

此の作の第三幕には地獄の場がありドンジュアンだのアナだの、悪魔だのが出て、地獄を論じ、極樂を論じ、人間を論じ、社會を論じ、そして遂に超人に言及して居る。「生の力」といふものをショウの哲學の中心とすれば、此の地獄の場は彼の哲學の精髓と云はるべきものである。けれども此の場は今日迄此の劇全體が

舞臺に上せられる場合には、常に略されて居る。此の場を除いた「人と超人」は魂の無い人間に等しい。上演の可能性を有する事が、劇としての第一の要件とすれば、此の要件に缺けた「人と超人」は劇として失敗のものと云はなくては成らない。

こゝに「生の力」といふのは一種不思議な力である。

ショウの説く所に依れば、總べての人間は皆此の力を天然に備へて居るが、此の力は男よりも女に多く働らく。此の力は其の性質として、優れた人間の産出を要求して居る。優れた人間の産出には、適當な結婚を必要とする。此の問題に對しての自覺は、此の力に富んだ女性の方が男性よりも強い。そして此の力に依つて女は男を最後に征服する。征服するといふ以上女性がボシティブな位

置にあるのは言を俟たない。女性は何れも此の力に依つて進む。男は總べての力を盡しても、結局此の強い自然の力に破られ終る。「人と超人」の重要な思想は實に上記の如きものである。劇中男性を代表するものにタンナーがあり、女性を代表するものにアンがある。タンナーは廿世紀のドン、ジュアンである。彼は古のドンジュアンの様に他人の拘束を受けぬ生活を探る。たゞ兩性の決闘の勝利者としての名譽は彼を離れて、女のアンの手に移つて居るところに昔日のものとは非常な相違がある。

シヨウ劇の常として、中心の二人並びに此れを圍む人々の間に種々な出來事が起つて居るが、結局タンナーはアンに征服されて結婚を承諾して居る。けれども事實劇中のアンは偽善家で、決して優れた女ではない。理智に富んだタンナ

ーが、何故に此の結婚を承諾しなければならぬかといふ事は奇異の念を自分に與える。「生の力」の偉大なるを示すために、作家がわざとこゝろいふ風に二人を描いたのであらうが、此れがために一面には矛盾した個所を生じた嫌ひがある。「生の力」が果して超人の産出を要求して居るものであるとした場合にタンナーとアンとの結婚を餘儀なくせしめた力が、果して前の定義に叶つたものかどうか。何となくスタンダードが違つて居る様な氣がされる。

地獄の幻の場でアナは超人が未だ創造されないといふ事を聞いて、其れを己れの務めだと悟る。けれども幻でないアンが、此れ程の強い自覺を持つて居るかどうかは疑しい。最後に彼女がタンナーに語つた「結婚は死かも知れない」といふ言葉に幾分の強味はあるものゝ、まだ多くの疑問が残つて居る。要するに

劇としては失敗である。けれども此所に失敗といふのは、哲學表現の劇としての失敗の意味であつて、たゞの喜劇としての失敗の意味では無い。

ダブリュー、エル、ジョージが其の近著の中に、倫敦で此の作の演せられた時ファーストとして大成功であつたといふ事を書いてある。ファーストとしての此の作は、極めて光彩ある逸品に相違ない。第一に社會萬般の事物を畫く劇中のものとして活動させたところに驚くべき手腕が認められる。

「ジョンブルの他の島」(John Bull's Other Island)は愛蘭文藝劇場のために書かれたものである。此の作の題名は極めて優れて居る。ジョンブルの他の島といふのは辭はる迄もなく、愛蘭の事である。

我々宗教上の觀念の薄いものは、愛蘭の問題などを眞に了解し得ない。アル

スターの自治案に對する反抗は、全く宗教に原因して居るから、其の解決が非常に困難なのである。我々にはローマンキャソリックとプレスビテリアンの二派が、どの位反目して居るものか察しつかない。此等の問題はネーティヴでなければ了解し難いもので、事は違ふが、乃木大將の自殺が外國人に不可解な現象として見られるのと同様である。英蘭人と愛蘭人との間には宗教上の關係から感情の疏通しない事が間々ある。

此の作では英蘭人と愛蘭人を比較しての諷刺に我々は最も多くの興味を持つ。殊に愛蘭人としてのショウの同郷人に對しての諷刺を頗る面白く思ふ。作中の一愛蘭人ドイルは同郷人の心を評して、空想以外に何もないと云つて居る。作に表はれた事實としては、己れの愚を認めないで活動する英蘭人が、結局其

の愚を笑ふくせに、不活動の愛蘭人の間に勝利を占めて居る。

「彼は何故彼女の夫に偽をついたか」(How He lied to Her Husband)は多くの芝居で、妻君といふものが常に活動するのに對して、亭主といふものを働かせようとした試みだとショウは云つて居る。此れを読む人の誰も氣づく様に、此の小さい一幕物は前の「キャンディダ」の巧みなパロディである。年少な「彼」は「彼女」に對する戀を歌つた詩を贈る。此れが「彼女の夫」の手に入る。「彼」は「彼女」に其の夫との縁を切り、自分と結婚する様にすゝめて、先づ其の夫の家から驅落しようとする。けれども「彼女」は此れを承知しない。其所に夫が歸つて来る。詩の事が問題に成る。「彼女」の名をオーロラといふ。「彼」は女のためにオーロラを種に偽りを云ふ。けれども「彼女の夫」は此れを怒つて、遂に撲り合ひを始め

る。「彼」は激して總べての事實を告げた。けれども其の結果は豫期に反して、「彼女」が「彼」を拒絶したといふ事が、其の夫に喜びと誇りとを與えて、忽ち仲直りが成立する。

其の上「彼女の夫」は「彼」の詩の印刷の許しを得る。そして其の題を「オーロラに」^ラとでもしようかと云ふ。「彼」は此れに答えて「彼は何故彼女の夫は偽をついたか」としたいと云ふ。

ショウの作はどれも鋭い。けれども其の多くは、歐洲文明の缺點、病源等に對する辛辣な議論や諷刺である。ところが「バルバラ大佐」(Major Barbara)では、作のモータイクが此等とは違つて、根本的のものに成つて居る。此の作には作家の嫌いな救世軍といふものに對する皮肉が盛んに現はれて居る。けれども自分

の面白いと思つて居るのは、此の救世軍問題でなくて、アンダーシャフトの主張にある。此のアンダーシャフトの意見は、即ち此の作のクイントエッセンスと成る。それは「貧」といふ事が社會の最も恐るべき敵だといふにある。總べての社會の罪惡は皆貧に原因して居る。此れを明かにするため、作家は、衣食の不充分な救世軍に依つて救はれた男が懺悔をするや、否や、金を盗むのに反して、アンダーシャフトの工場では、總べての職工が皆安樂な平和な日を送つて、アンダーシャフトを親の如くに思ひ、最も危険な火藥の製造に何の不平も心配もなしに従事して居るのを描いた。全く「恆産無ければ恆心無し」と云ふ言葉に等しいものである。

作中のバルバラ大佐は、其の嫌惡し、且つ輕蔑して居た父のアンダーシャフト

の工場を見、彼の言葉を聞いて、遂に此所こそ眞のサルヴェーションの行ひ得るところであるといふ事を知る。即ち總べてを破壊するのは貧である。衣食の足りない人間に、食物の代りとして、神を説いても、何等の効もない。萬事は先づ衣食足りての後にある。

此の作はこゝろいふ中心を圍んで、いろいろの面白い出來事があり、種々の警句や諧謔や皮肉に満ちて居る。

「貧」といふものに對する思想が、尠くも東西兩洋の人種に共通なものであるために、自分は此の作をシヨウの諸作中「人と超人」と並んで、大きいものと認めて居る。但し如何にして「貧」を絶やすかといふ事に關して、此の作が何等の力をも持つて居ないのは、極めて物足りなく感ぜられるところである。

多方面なシヨウは「醫師の板挟み」(The Doctor's Dilemma) に多くの醫師を描いた。此の作には二つの注意すべき事があると思ふ。其の第一は天才の青年畫家が、一般の道徳上から見て、甚だ不都合な行爲並びに結婚をしながらも、其の美しい妻と唯二人眞の愛を樂み得た事第二は此の作の云はうとする、すべての職業が素人^{レイライ}に對してコンスピラシイであるといふ事である。第二の方には此の作では特に其の職業として、醫師が用ゐられた。

或る醫師が肺の新注射法を發明する。

天才ではあるが不道徳な青年畫家と、正直ではあるけれども才能の乏しい醫師の二人が同じ病に悩んで居る。醫師は療法の關係から、其の中の一人にしか注射する事が出来ない。彼は其の何れを撰ぶべきかに迷つた。此れがディレン

マといふ題の所以である。けれども此の醫師の、作を通じての行爲を考へてから見れば、此のディレンマは、眞の強い苦しいものと認める事は出来ない。

作家は多くの醫師を描いた。其の中の外科醫は總べての病因をブラッドボイズニングに歸して、手術を主張し、又他の内科醫の一人は、科學萬能論の信奉者でありながら、自身アンテトキシンの用法を知らない。

作家は此れを悲劇といふ。けれども彼の喜劇が事實喜悲劇の感じを持つて居る如く、此の悲劇も亦喜悲劇の一つと見られる。天才の畫家の死ぬ此の作よりも、親子の別れる「ウァーレン夫人の職業」の方が、遙かに悲劇としての強味を有して居る。

「結婚」(Getting Married) に至つては、殆んど劇といふよりも會話に成つて居

る。此れは驚くべき長さの一幕物で、各種の人物が各種の見地から、結婚といふ現象に對する意見を戦はして居る。結局ショウは結婚を以て避けがたいものとした。そして此の避け難い結婚のためには、二人の當事者間に、能ふ限りの満足な條件を備へて置くよりも仕方がないと云つて居る。其の問題の原因と成つたのは、結婚に關する英國の法律の不備にある。

此作には一種の哲學者としての八百屋や、更に不思議な石炭商の妻や、よく己れを知り、又人を知る牧師や、頑固な老軍人や、其他が集つて最も愉快な會話を形作つて居る。そして勿論兩性の哲學は出て居る。殊に此れの斷然と引用されて居るのは、此の作の序文である。長い序文の中に作家は一夫多妻を論じて、此れの可否が道德で定まるべき問題で無く、兩性の數に従つて決せらるべき問

題であると云つて居る。

其の論證として、一夫多妻の行はれて居る土地では、此の事に對して何等の疑ひを持つて居ない事を挙げ、更に一夫多妻といふものが廣く行はれる場合に、此れに反對するものは、女でなくて、男であると説いて居る。其の理由は、若し一夫多妻が一般に行はれる様に成れば、優良な種族を得やうとする自覺の強い女性は、必ず多數の中から、優良な男子を探り、以て其の種族の向上を圖る。彼等は必ず才能のない一人の男の一人の妻と成るよりも、優良な一人の夫の多數の妻の一人と成る事を希望する。従つて才能のない男は結局妻を得る道を失ふ。それ故一夫多妻の反對論者は、必ず男性の中から生じるに相違ないといふのである。勿論劇としての筋は持つて居るもの、殆んど何の頁を開いて見ても、筋

を離れ、唯各の人物の各個の意見を讀むだけで、非常に興味がある。そして何れも滑稽の中に眞摯があり、眞摯の中に滑稽がある。

馬盜坊 (The Shewing up of Blanco Posnet) は英國で、検閱官に公演を禁止されて居る。其の原因は人に依つて説を異にする。けれども此の作が検閱官の許可を得なかつたといふことは、神といふものゝ取り扱ひ方に歸因する事と思はれる。キリスト教に就ての思想の乏しい自分は、到底宗教問題を云々する資格のないものであるが、此の「馬盜坊」に現はされて居る神に對しての考へが、一種特殊のものだといふ事だけは解る。題の示す様に、此の一篇はブランコポスネットといふ馬盜坊を中心として居る。従つてこゝにいふ神に對しての思想といふのも此の馬盜坊の抱いて居たものである。

北米合衆國の或る街に一日馬盜坊の事件が起つた。犯人のブランコポスネットは捕へられて、タウンホールで取り調べを受ける。彼の盗んだ馬といふのは、其の兄に當る男の厩につながれて居たものである。此の兄の日頃の行爲に對して不平を感じて居た彼は、其の腹いせとして、其の馬を盗み去つた。ところが實際は、此の馬が其所の奉行のものだつたのである。ブランコポスネットは此の馬に乗つて町を離れた時、一人の女が瀕死の幼兒を抱いて來るのに逢つた。そして一刻も早く醫師の許に行ける様にと、其の馬を女に與えた。彼が捕えられた時、彼は勿論馬に乗つて居なかつた。町の法律として、馬盜坊は死刑に處せられる事に成つて居る。けれどもブランコポスネットが捕えられた時、其の傍に肝心の馬が居なかつたといふ事が、流石に疑ひを起して、證人が呼び入れられる。其

れはフィミーといふ若い女であつた。彼女は罪人に對して面白からの感情を持つて居るため、口を極めて彼を罪に陥れようと努める。其の中に盗まれた馬が一人の男に連れられて歸つて來た。そして盗人も一所に引かれて來た。此れは云ふ迄もなく、瀕死の幼兒を抱いて居た女である。彼女が現はれて局面は一轉した。フィミーは此の女の顔を見、言葉を聞いて、到頭偽りを續ける事が出来なく成つてしまふ。馬が無事に其の手に戻つたので奉行は此の裁判を終り、ブロンコ、ボスネットも無罪といふ事に成つた。芝居は主人公と町の子供達との問答と、それに續く彼とフィミーの握手に終つて居る。此れだけでは決して問題の起る筈はないのであるが、主人公が、唯馬を女に與えた前後の考へが問題と成つたのである。

彼は神を目して一種のトリックをするものと思つて居る。そして荒い心を持つて居ると信じて居る自身が、馬を盗んで町を去つた時に、瀕死の子を抱いた女に出會つて、其の子供の小さい手が、彼の襟首に冷たく觸れたとき、一種不可解の柔かい感情が胸中に湧いて、其の馬を女に與えたのを、全く神のトリックに掛つたものと信じて居る。彼は己れの行動をすっかり神のトリックに依つたものだと解釋して、神をトリックスターと觀じた。此所が此の作の禁止された原因と成つて居るのであらう。

けれども最後に彼は世に二つのゲームの行はれて居る事を知つた。其の一つは彼自身の演じた様な、ロットンなものである。他の一つは馬鹿氣では居るが、ロットンではない。即ち彼は今迄の自身生活して來た道が下等なものであつた

のを知る。彼はロットンなゲームをして居た。ところが神は彼に對して、大なるゲームを行つた。そして彼は此れから以後大なるゲームに就かうと決心する。「新聞切抜」(Press Cuttings)は千九百九年に書かれたトビカルなスケッチである。此の中には恐ろしい女權運動者^{キャフラジエット}と、更にそれよりも恐ろしい非女權運動者^{アンライセフラジエット}が描かれて居る。

其の外にはアスキスとキチナーに響かせた首相パルスキスと將軍ミッチナーが活動して居る。けれども此れは特に論じる程の作ではない。たゞショウの珍妙な趣向が人をアット云はせるだけの事である。女權運動者の反對者が、女權運動者以上に恐ろしいもので、若し此れが Votes for women の代りならば、寧ろ總べての女に六票宛の撰擧權を與えた方が増したとミッチナーの云ふ所などは全

く奇想である。たしか之れは公演を禁せられたものである。

出る出ると云つて出なかつた「ミスアライアンス」一巻が倫敦の本屋の窓に始めて飾られたのは、今年の五月の十八日であつた。此のショウの最近の戯曲集には「ミスアライアンス」以下二篇が載せられて居る。

「ミスアライアンス」(Misalliance) は前の「結婚」に似たものである。ミスアライアンスとは「不釣合の結婚」の意味である。此れに附けた作家の序文は例に依つて長いもので、親子といふものに關する論文である。「結婚」の如くに、此れも亦長い一幕物である。そして作家は此れをブレイでないと辭つて居る。總べての形式は「結婚」と同様であるが、更に奇抜で、事件は旋風の様な目まぐるしい廻轉をして居る。

「劇場の夜々」の中に著者ウァルブルックは、此の作のキャプリアスなどところと、大家で無ければ企て及ばぬ程度のノンセンスを以て、ペートーヴェンの「ローストベニイ」の「ロンドキャプリアス」の有する趣きに比して居る。

先づ作の中心に成るものに、ジョン、タールトンと云ふ有福な商人が居る。彼はタールトン^{アンダーウェア}下の着の製造家で、田舎のハインドヘッドといふ所に廣い庭と邸宅を持つて居る。彼はジャックといふ極めてブラクティカルな息子を持つて居た。ところが此の妹のヒバティアといふのがショウの女の一人である。彼女は両親の束縛を呪ひ、常にアクティヴなものに成る事を理想として居る。タールトンの友人にサンマーヘイといふ貴族があり、其の息子をベントレイといふ。ベントレイは、我儘な神経質な弱い青年であつたが、他の青年に比べて頭があるといふの

で、ヒバティアは彼との婚約を承諾して居た。ところが此等の人々がハインドヘッドの家に集つて居る時、飛行機が俄然庭に墜落する。其の操縦者はベントレイの友人のジョセフ、バリーシプルといふ青年であつた。彼の飛行機には一人の同乗者があつた。

バリーシプルは此の同乗者の名前一つ知らないで居た程、操縦の方に忙しかつたのである。ところが此の同乗者はリナ、シユチェバノウスカといふ波蘭生れの寄席藝人で、輕業、奇術等に日々を冒険に過ごす事をモットーとして居る女であつた。

飛行家バリーシプルは頭腦と體格の兩方を備へて居る好青年だつたので、始めて此の様な理想的な男を見たヒバティアは忽ちにベントレイを棄て、此れを愛

し始める。ヒバティアには實を云ふとロードサンマーヘイ自身も結婚を申込んだのであるが、老年の故を以て拒絶された。

人々が室内に居ない時を窺つて、ジュリアスベーカーといふ男がピストルを持つて忍び込む。彼は物音を聞きつけて、傍の土耳其風呂の中に隠れる。彼は昔タールトンが其のシヨップガールに生ませた子供であるが、其の女は不幸な運命の中に死んでしまつた。ベーカーはタールトンを殺して母の讐を討ち、己れも其の場で自殺するつもりで此所迄忍んで來たのである。彼は浴室の中に隠れて居る間に、ヒバティアが猛烈な戀をバーシヴルに語つて居るのを見且つ聞いた。遂に彼はタールトンの面前に飛び出した。けれども其の肝心の目的は、かの女輕業師に邪魔されて、不成功に終り、且つピストル迄取り上げられてしまふ。彼

はこゝに、ヒバティアの先刻の行動を罵る。ところが此れが、バーシヴルの憤りを買つて、遂に謝罪狀を書かせられる。丁度其の場にタールトン夫人が來かゝる。そしてふと此の男の素性を知り、彼を優しく勞つて、謝罪狀を引き裂いてしまふ。

ヒバティアは遂にバーシヴルの手に歸した。

タールトン父子、並びにヒバティアに棄てられたベントレイは何れも、リナ、シユチエバノウスカと結婚しようとして、拒絶されてしまふ。シユチエバノウスカは人々の前で、女性の獨立の誇りに關しての恐ろしい演説をして、こゝに芝居は終つて居る。

總べてを生き〜とさせて居るのは、作家の機智である。

ショウは此の作の中に、以前の諸作に現はした思想のメドレイともいふ様な感じを出した。唯最も力を入れて居たのは最も親しかるべき親子といふものが、常に不思議な恥に似た観念と、同情の缺亡とから、兩者の感情の間に埋め難い溝を作つて居るといふ事である。

作者の現はした機智は、事實脚本を読むより外にそれを知る方法がない。不意討を喜ぶ此の作家は、此の作にも得意で其れを行つて居る。

タールトンはチユスタトンを引き、イブセンを引き、ホイットマンを引き、彼の讀書癖が口にさせる多くの作家の名前の流れる様に出て来るのでも、既に人を笑はせる。

ロードサンマーヘイは印度總督をつとめた名政治家であるが、常にジンギス

カンを引用する。

其他タールトン夫人の上流夫人に對する不快、ジュリアスペーカーの社會に對する不満、リナ、シユチュエバノウスカの演説など皆面白いものである。

此の次ぎの作は「沙翁と女皇」(The Dark Lady of the Sonnets)である。此の題は譯し悪いので、作中の事柄からして自分の勝手につけたものである。短かい此的一幕物の場面は、眞夏の夜半のホワイトホール宮殿のテレースで、此所に動く人物は沙翁、エリザベス女皇といふ様な古風な人達である。沙翁が女官の一人に會ふために忍んで来る。其所に一人のレディが夢遊病の様子で出て来る。沙翁は此れを呼びさます。二人の話して居るところに、メリーといふ女官が出て来て、此の様子に怒りを發して、二人を突き飛ばす。ところが此のレディは彼

女の主人の女皇エリザベスであつた。併し沙翁は見事に女皇の怒りを和らげ、且つ其の計畫に賛成を得る。それは國民劇場創立の事であつた。女皇は國民の心に通じて居たので、此の事の實現は二百年後でなければ見られぬ事を知つて、其の頃にはお互ひに土に化して居る事だらうと嘆じる。けれども沙翁は彼並びに女皇の名の不滅なるべき事を豫知して居る。

沙翁が人々の言葉の中で美しいものを、一々手帖に控えて、作劇の際の用にするとところが面白く出来て居る。

有名な「弱き者よ汝の名は女なり」なども、斯くして拾はれた事に成つて居る。

ショウ自身は無論沙翁にも、女皇にも成つて居る。

沙翁がグロープ座で少數の見物の前に演せられる悲劇と、俗受けのする「御意

の儘」の様な喜劇とを比較しての諷刺などは作家獨特の味がする。更に國民劇場創立に關しての女皇の言葉はよい。女皇は其れが英國に實現されるのは、總べてのキリスト教國が、野蠻な露西亞や獨逸に至る迄そういふ劇場を持つ様に成つてからの事だ。英國は冒險をしない。唯冒險をするのは流行に遅れまいと欲した時のみである。併し若し後世に自分の言葉を傳える事が出来たならば必ず沙翁の希望を充たす様に告げるのを忘れまい。スコットランドの歌うたひは國民の歌を作るものは、其の法律を作るものよりも偉いと云つたが、此れは戯曲に就ても當て嵌まる事だらうといふ意味の言葉を述べて居る。前に書いた如く女皇は此の事の實施を二百年後とした。二百年後といふのは云ふ迄もなく今日に當つて居るのである。

「ファンニイの處女作」(Fanny's First Play)は一昨々年リトル座に始めて上場されて非常な好評を得、且つ作家が匿名を用いた、めに一層問題に上つたものである。ショウは此の時 XXXXXXXX XXXX といふ變名を用いた。

作家は此の作を全くの「戯作」^{ポットボーラー}であるから、序文の必要も無いと云つて居る。けれども此の戯作の目的としたところは至極明かである。「結婚」あたりから變つて來た作風は、此の「ファンニイの處女作」に成つて、諧謔、構想共に以前のコート座時代のものに戻つたと當時批評された。

オドウダといふ愛蘭の伯爵で、近代の美術や思想を絶對的に嫌ひ、常にヴェニスに住むといふ人がある。彼には一人の娘がある。此れがファンニイである。伯爵は此の娘を劍橋^{ケンブリッジ}に送つた。彼は自分の居た頃の劍橋と、今日の劍橋とが同

様の空氣を持つて居るものと考へたのであつた。ところがファンニイは今日の劍橋で、すつかり新しい空氣を吸つた。そして一つの劇を作つた。彼女は其の誕生日の祝ひとして、其の處女作を演ずべき俳優と、舞臺監督と、優れた批評家とを欲した。そして遂に此の作は私演されるのである。作者の名は勿論堅く秘められた。此のインダクションが終つてから、三幕の芝居がある。勿論此の作の中心と成つて居るのは、此れである。

此所に二軒の極く親しい間柄の有福な商人の家があつた。此の二軒は一つはノックス、一つはギルベイト云ふ主人を持つて居る。此の兩家の主人夫婦は、體面といふ事を生活の最大要義として居るのであつた。ところが俄然此の二軒に同じ様な事件が出來上る。それはギルベイトの息子のポピイト一方ノックスの娘

のマーガレットの二人が、どちらも行衛不明に成つたのである。此の二人は許婚なのであつたが、兩家の親達は體面を恐れて、互ひに此れを隠さうと苦んで居る。ところが或る日ギルベイの家にドラといふ女が尋ねて来て、ポッピーが酒を飲んで巡査と格闘した、めに捕へられて牢に入つて居る事や、ポッピーが彼女を愛して居る事や、彼女も亦巡査を撲つた、め捕えられて二週間をホロウェイ監獄に過した事などを語り、ポッピーは一ヶ月の入獄か罰金かと云ふ事に成つたけれども、金が無かつたのと、自分の名前を明かすのを憚つたのとで、到頭入牢といふ事に成つた事、これから罰金を調べて彼を早速救ひ出したいといふ事を打あける。ギルベイは失心せん計りに驚いたが、止むを得ず罰金を拂つて、息子を連れ歸る。一方ノックスの家でも、兩親の心配して居る最中に、一人の若い佛蘭西

人と一所にマーガレットが歸つて来る。そして彼女も亦二週間をホロウェイに過したといふ事が明かになる。辭つて置くがホロウェイの監獄は、亂暴なサフラジョットの收監されるので知られて居る。

マーガレットは仔細を物語る。其の日彼女はロイヤルアルバートホールに開かれたサルヴェーションミーティングに行つた。そして殆んど夢中に成つて讚美の歌を唱えた。彼女の心は昂つた。そして其の儘歸宅するのが物足りなく成つたので、彼女は乗合自働車をピカデリーで下りて、歡樂の巷の方へ足を入れた。やがて彼女は立派な劇場内の人と成つて、踊りを見た。見物人は少しも楽しんで居る様子は見えなかつたが、舞臺の上の踊りは極めて上手なものであつた。此れを見物して居る間に、此のフランスの海軍士官のデーヴァレーといふ人と話

をした。彼女は更に自身踊り度く成つて、此の佛蘭西人と舞踏室に行つた。其處には多勢の人が居たが、多くは其の着物を見せる爲めに座つて居るばかりであつた。併し二人は盛んに踊つて、遂に三鞭を飲んだ。丁度それは劍牛のポートルースの日の晩だつたので、學生達がそこに多勢入つて来て、酒の勢で、亂暴を始めた。此れを聞いて巡査が来た。巡査は亂暴をしないものにも無法をした。彼女は怒つて彼等の一人の顔を撲つて、其の前歯二本を折つた。デューヴァーレーは疾風の如くに足を舉げて立廻つたが到頭捕えられた。それから二人は別々の監獄に投せられた。デューヴァーレーは刑期が終つて出獄すると直ぐ様罰金を收めて、彼女を放免させて呉れた。

ノックス夫婦の此れを聞いた時の驚きは云ふ迄もない。マーガレットは今迄の束縛された自分を棄て、自由な新らしい人間に成り得た事を喜んで居る。母親の祈りも効がない。父親は何とかして、此の事を世間に知らせまいと苦心する。其の間にあつてマーガレットは人々に自分の行動を吹聴しようと思ふ。

ギルベイの家の召使にジャギンスといふ男がある。ポッピーは此の男に許婚の女の感情を害さずに、別れる事を相談して居る。其所にマーガレットが訪ねて来る。ポッピーは自分の入獄を白状する。マーガレットも亦自分の事件を語る。ドラが来る。彼女はマーガレットと同盛したので、既に知り合ひであつた。ポッピーはマーガレットの話の聞いて、あまりに甚し過ぎると云ひ、遂に二人の間につかみ合ひが始まる。ドラがジャギンスを呼ぶと、彼はデューヴァーレーを連れて入つて来たので、二人は忽ち喧嘩を止めてしまふ。其の中にギルベイ夫婦の聲

が聞えたので、四人はジャックギンズの部屋の中に入つてしまふ。其のあとで、ジャックギンズは暇を貰はうとする。そして問答の末、彼が或る公爵の弟であつた事が判明する。丁度ノックス夫婦が訪ねて来る。兩家の親達の前に四人のものは出る。ポッピーはドラと結婚しようとした。

マーガレットの父親は、デューヴァレーに娘を貰つて呉れるかと尋ねる。ところが其の返事に依ると、彼は既に妻子を持つた人であつた。ノックス夫妻は彼の今迄の行爲に激した。此れに對してデューヴァレーは英佛の家庭の比較論を始める。そして英國の家庭の教育法を激賞し、英國の娘の態度を讚嘆する。

此のあとで、ジャックギンズの素性がギルベイの口から洩れる。此れを聞いたマーガレットは彼を見た最初の日から天然の戀を感じて居たといふ。ジョージギンズ

は、もとより喜んで彼女の申出を承諾した。デューヴァレーは、此の様な事は佛蘭西では到底あり得べからざる事だと云つて、己れの手をキッスしながら *La belle Anglaise* を叫ぶ。此れでファンニイの劇は終る。此所迄は體面といふものに對する鋭い諷刺であるが、此のあとにエピソードとして、批評家を種にした諷刺がある。

伯爵は此の芝居に狂せんばかりに惱まされて、四人の批評家の意見を尋ねた。一人は此れに答えて、此の様なもの古めかしいイブセン流の癡言だと云ふ。又一人は此の作に現はれた様な事は、近代の娘に取つては朝飯前の事だと云ふ。次ぎの一人は、作者の名が解らなくては、批評の仕様がないと答える。彼は若しピネロとジョーンスの作があつた場合に、兩方に同じ事は書けない。従つてどち

らがピネロので、どちらがジョーンズのたといふ事が解らなくては、何とも云える筈がないと云ふ。彼は更に語を續けて、此れが何劇なのかもわからなくては困る。喜劇なのか、悲劇なのか、ファースカメロドラマか……眞面目なのか、巫山戯て居るのか作者が知つて居るのなら話して貰はう。若し作者が知らないといふのならば、我々作者でないものが知らないのは當然である云ふ。此の批評家は更に此れがよい作かどうかといふ伯爵の間に對して、若し此れがよい作家のものならば、よい作に相違ないのだから、作者の名前さへ知れば、速座に返答しようと思つて居る。

他の一人は此れを常例に従つて海軍士官を主人公とする有りふれた家庭的のメロドラマとして、散々に攻撃し、作者はグランヴィルバーカーに極つて居る。

ギルベイ老人は「マドラスハウス」から、そつくり出て來て居ると云ふ。此れを聞いた一人は、此れに反對して、ピネロのものだといふ。そして女主人公が「トランクエリイ夫人」や「アイリス」などと同型だと強辨する。更に他の一人は、佛蘭西人の演説からして、此れをショウのだと云ふと、此れに反對する一人は、此れはつまらない作だが、中に感情の閃きがあるから、ショウではない。ショウは生理的に感情を描く事は不可能だからと云つて居る。しまいに此れが、ファンニイの作だといふ事が判明する。批評家のトロッターといふのは、此れを豫知して居つた。他の三人は此の事を知つて、忽ち此の作を賞讃し始める。トロッターの口から、ファンニイがサフラジエットの一人だといふ事が人々に知られる。

一同はカーテンコールを忘れて居た。伯爵の友人の注意で幕が上がると、舞

臺には前の幕の最後の場の儘で、俳優が並んで居る。人々は握手して成功を祝ふ。

伯爵は一同に向つて、此の作の善悪は別として、自分は俳優の演技に就ては、誰も同意見の事と思ふと云ふ。批評家は之れに對してヒヤ／＼と喝采する。エビログはこゝに終りを告げる。

此の作のジャッキンスはシヨウの哲學者の一人である。ポビイとの對話に此んなどころがある。

ポ「約束のある女と破約でゴタ／＼を起したり、無頼漢みたいな振舞をし
ないで、手を切るうまい法をお前知らないかい。」

シ「存じません。若し御婦人が、たつてあなたをお望みなら、無頼漢流に、

手をお切りに成るより外に法は御座いません。」

ポ「でも、己れが本當に構はないとすると、己れと結婚するのは、女の仕合せでないんだがなあ。」

シ「女は仕合せのためばかりに婚禮するものでは御座いません。唯老嬢に成らにず、結婚した婦人と成りたいために婚禮する事が間々あります。」

ポ「ぢやあ、どうすりやあいゝんだ。」

シ「婚禮なさい。でなければ、無頼漢流をやるんです。」

自分はいつか此の作の再演される事を希望して居る。

此の作以後倫敦で演せられた此の作家の新作には、先づ「アンドロクラスと獅子」(Androcles and the Lion)がある。

ショーウはローマの昔話を材として一種不思議なものを書いた。此の中に作家はキリスト教に對する諷刺を書いたけれども、かの「バルバラ大佐」の中の救世軍に對するもの程の巧妙さと辛辣さを持つて居ない。ショーウは此の作に獨創に就ての天分を見せたが、諷刺は深味に缺けて居た。従つて此の作は大して問題に成らずに終つた。

其の次ぎは「キャセリン太后」(Great Catherine)である。

此れも餘りに作家の道樂が過ぎて、内容に新しいところを有して居なかつた、の失敗した。作家は此れを「十八世紀に於ける露國宮廷生活の小スケッチ」と稱して居る。

此の作でも、「アンドロクラスと獅子」に見る様な茶番的の巫山戯方が盛ん過ぎ

た。けれども其の趣向は實際奇抜であつた。そして頭から英蘭人を馬鹿にして居る。

「音樂療法」(The Music Cure)は最近の作である。恐らく次ぎの「ビグマリオン」よりも後に作られたものであらうと思はれる。ショーウは始まりから此の作をノンセンスと辭つて、自在に其の機智を働かせたので、前の二つよりも遙かに面白いものが出來た。バラドックスの好きな作家は「人と超人」などに出た自身のパロディを此の一幕物の中に書いた。且つ作中の人物は皆トピカルなもので、諷刺茶番ともいふべきものである。人物の一人には「マルコニ無線電信會社」の株に手を出して物議を醸した藏相ロイド・ジョージなどが居る。彼は此の作では「マルコニ會社」の株に手を出した青年として、現はされて居る。實際スキットとし

ては上乘のものであつた。

「ピグマリオン」(Pygmalion) はローマンスと名附けられて居る。花賣娘が短日月の間に、公爵夫人と云つても差支えない程の貴女に變化したところが、ローマンスといふ名のある所以だ相である。何れにしても笑ひの分量の多い妙な作である。

其の構想は例に依つて奇抜なものであるが、中心と成つて居るのは、相變らず英國の中流社會に行はれて居る道徳や禮儀作法に對する嘲笑に外ならない。

此の作で花賣娘が^{フエネアイツクス}聲音學の大家ヘンリーヒギンズの熱心な教授に依つて、貴女に變じる。しかも貴女に成つてからの女は前の如くに花を賣るわけにもゆかない。従つて何等自活の道を失ふ。唯一つの方法は何人かと結婚するだけであ

る。こゝでは「婦人と社會」の問題が出る。

ヘンリーヒギンズは、此の貴女に變じた花賣娘を己れの妻にする考へは無^い。而かも彼女を手離す事を欲しない。花賣娘エリザは自分が、ヒギンズの成功と勝利に用ゐられた一種の傀儡に過ぎないのを知つて悲む様に成つた。彼女は貴女としての話し方を覺えた。けれども貴女と花賣娘との相違は、如何に「扱はれるか」にあるので、如何に「振舞ふか」にあるのではない。ヒギンズの友人のピッカーリングは花賣娘の時から彼女を貴女として取扱つた。ところがヒギンズは貴女と成つてからの彼女を、花賣娘として取扱つて居る。ヒギンズは明かに此の事を是認して居る。彼は所謂作法を知らない。唯彼は花賣娘にも貴女に何の區別なしに對して居るのであつた。

ドイツで演せられた時には、最後にエリザが冷然と出て行つてしまふ。ヒギンスは是非とも女を自分の家に呼び戻さうとして、其の出て行く前に、手袋や襟飾を買ふ事を頼む。けれどもエリザは確答をしないで出て行つてしまふ。併しヒギンスは、大丈夫彼女が己れのところに歸つて来る事を、確信して終つて居る。

けれども倫敦で演せられたのでは、エリザが去つたあとで、ヒギンスは扉を開いて見たが其の影も見えない。彼は女の名を大聲に呼んだが、何の返事も無い。彼の心は漸く不安になる。それから一分程経つて、もう萬事終つたと思ふ頃、突然戸口にエリザが立つ。そして手袋の番號を尋ねる。謎の解けてしまつて居る代りに、此のサスペンスに現はした作家の機智と道楽氣に、最も愉快な大

詰が見られる。

以上で兎に角ショーウの作品廿六種に就て述べ終つた。

此の中で「アンドロクラスと獅子」以後の四篇は、英文のものは未だ發行されて居ない。どうせ二三年後でなければ得られまいと思ふ。獨譯のもので、自分の知つて居るところでは「アンドロクラスと獅子」(Androkus und der Löwe)と「ピグマリオン」(Pygmalion)の二つが發行されて居るが、他の二つは未だの様である。

此の外にショーウの脚本では「感情と毒と化石」(Passion, Poison und Petrification)といふのがハリーファニスのクリスマスアニニアルの數年前のものに出たといふ事であるが、手に入れ損じたので全く内容さへも語る事が出来ないの

は殘念である。

然し要するに、ショウの作は、どれも理智的であり、機智と皮肉とに充ちて居る。けれども其の作に現はれるのは、ショウの男女であり、彼等の語るところは作家自身の社會觀である。而かもショウの對照とする社會はキリスト教の文明の生んだ社會である。従つて彼の作は一般の人類に對する建設といふことには強い大いなる力を持つて居るとは云ひ難い。彼の作はどうしてもネガティブである。

彼の描く人物は皆彼のために存在するもので、シングの作などに見る様な彼等自身のために存在するものでない。一面から見れば、全く作家の所説を強辨する用のみ供せられて居るとも見られ得るのである。此れがために、彼の作

のすべてが永久の價を有して居るとは云ひ難い。

けれども歐洲文明の辛辣な批評家とし、且つ革命家としてのショウは今日偉大なる力を持つて居る。此の方面から見た彼が、現在の世界の劇作家中比類無いものである事は、疑ふ餘地も無い。

人はショウも種が盡きて來たといふ。近來の彼が好んで悪巫山戯を喜ぶ様に成つた事、其の作が以前の様な深刻なところを失つて來たといふのは事實である。けれども彼は既に成功者である。彼の「音樂療法」「ビッグマリオン」等は其の優れた道樂仕事に外ならない。我々は六ヶしい事は云はずに、唯彼の機智を喜びさへすれば足りるのである。事實百年の後、彼の作中最も貴ばれるのは此の機智であらう。

ジョージバーナー ショウ

此所に此の冗長な一章を終る。

一六二

ジョン・ミリングトン・シンゲ

John Millington Synge

「……舞臺の上では我々は現實リアライティと喜ジョイの二つを持たなければ成らない。此れが理智的の近代劇の失敗した理由で、同時に人々が荒唐な喜ジョイに満ちた喜歌劇オペラコミックに倦きて来た理由である。……善い劇では一つ一つの科白が皆胡桃や林檎の様な風味を備へて居なくては成らない。此の様な科白は詩に涸れた人々の間に日を送る人の手に書き上げらるべきものでない。愛蘭に於ては猶この數年の間は、熱烈な莊麗な且つ優雅な通俗な想像イマジネーションを我々は持つ。従つて我々書かんと欲する者は此の機を利用して筆を取る。此の機會は地方生活の春が忘れられてしまつたり、取り入れ時の有様が僅かに記憶にとゞまるのみであつたり、藁屋根が煉瓦造りに變つてしまつて居る様な土地に住む人に到底得られないものであるから。」
ツェー、エム、エス（千九百七年一月廿一日）

現實リアリティに傾き過ぎて、喜ジョイを顧みない多くの近代劇に不満を感じて、其の兩者を得たいと叫んだシングは優れた見識を持った作家と云はねばならない。多くの近代劇は詩に涸れたかうらみがある。シングの作に見るのは現實と喜と詩である。胡桃や林檎の如くに香ひ高い科白を欲した彼は、此れを實現して我等に與えて呉れた。

イエーツやジェーシモアに新たに開拓された愛蘭文藝は一人の天才シングを生んだ事を誇りとしなければ成らない。彼の作は實に今日の作であり、又明日の作である。自分は更に進んで彼の作には不朽の生命が宿つて居ると云つても憚らない。(こゝに辭つて置くが自分は彼の名前をシングと讀むのか、キヤジと讀むのか明かに知らない。唯どちらでも英蘭人の間に通じる事だけは確かである。)

ジョン、ミリングトン、シングは千九百九年の三月に死んだ。彼の様な作家が四十歳に至らずして逝つたといふ事は愛蘭の文藝に對して、多大の損失である。けれども彼は六つの戯曲を遺した。二つの眞の詩を書いた人は詩人として不死の價値を持つとシーマンは云つた相であるが、此の言葉を以てすれば、シングも亦不朽の名を有すべき劇作家である。

シングの本領は劇作にあつたが、彼は一面明かに詩人であつた。郷土的平民的の此の詩人は愛蘭特にアラン島の漁夫や農夫の間に交つて、彼等の粗野な生活に親んだ。彼が其の作中に現はした現實味は皆、彼自身の經驗が生んだものである。シングは始め大陸に住んだ。そして特に佛語を學んだ。彼の作にはモリエールなどから得たアイロニーが発見される。而かも其等は全く彼自身のも

のと成り、且つ其の機智と合して作中を快く流れて居るのである。詩人として、愛蘭人として、彼は頗る想像力に富んで居た。彼は深く郷土を愛し、平民の生活を喜んだ。彼の描く所は多くは粗野な農夫や漁夫の生活であり、其の深い観察力と巧みな筆致に依つて彼等の飾らない性格を躍動させた。此等は皆現實的であるが、しかもすべては作家の詩に薄く包まれて居る。そして作家自身は決して平靜を忘れない。

シングの作に現はれるのは、皆未開の感じを持つた荒い人達である。彼等の間に起る葛藤は描かれて彼の作と成る。それにも關はらず此等は皆美しい藝術品と化せられて居る。汚れた着物を着、泥だらけの足をした勞働者が林の中を歩いて來るといふ様な、事實上毫も美しくない圖も名手の繪に變すれば、美しい

應接間の裝飾として心地よいものに成るが、シングの作も全く此れと同じに見る事が出來るとエドワード・ストラーは云つて居る。

愛蘭の作家達は皆其の郷土の生活を材とした劇を書いて居るが、シング程其れを美化し、而かも深い心理描寫を試みたものはない。

劇作家として彼の最も優れて居たのは、其の作の釣合の巧妙で、常に平衡を破らなかつた事であらう。愛蘭の粗野な生活を好んで描いた作家は、其の科白も總べて方言で書いて居る。作家自身「二三の單語を外にしては、私がまだ新聞も讀めない少年時代から知つて居る言葉ばかりを用ゐて此れを書いた」と其の作の序文に書いて居る。併し方言とは云ふものゝ、人々の語るところには作家自身の機智と詩とが溢れて、粗野な中に、美しさとなつかしさを人に感せしめる。

シングの最初の作は一幕物の「谷の影」(The Shadow of the Glen)である。此の作には愛蘭に行はれる愛に依らずして、金に依る結婚の生んだ葛藤が描かれて居る。

ノラといふ女が居た。彼女はダンブルケといふ百姓が多少有福なところから、老人なのをも構はずに妻と成つて霧の外には何物も見えぬといふ寂しいウィックローの谷に住んで居る。老人のダンは妻の貞操を疑つて、此れを試すために死んだ真似をして寝て居る。寂しく雨の降る晩に一人の浮浪人トラウレンツが宿を乞ふた。ノラは今迄饑えて居たいろ／＼の珍らしい話を、此の男から聞いて大層喜び、ウィスキイをすゝめたり、其の乞ふ儘に針と糸とを出して與えなどする。ノラは夫ダンの死を十哩先きに住んで居る、彼の妹に知らせるために人を頼みに出て行

く。老人はノラに己れの屍體に其の妹以外の者の手を觸れる事を嚴禁して置いたのであつた。浮浪人が一人に成ると、死んで居ると思つて居たダンが起き上つて、驚いて居る男に酒を注ぐ事を命じなどし、棚から棒を取り出させて、妻の不貞を語つて居る。其の中に人の足音が聞えたので、老人は再びシートにくるまつて死人に還る。ノラはマイケルダラといふ若い男と歸つて來た。ノラは浮浪人トラウレンツを其方除キョウボウけにして、マイケルと茶を飲み乍らいろ／＼と話しを始める。マイケルはダンが多少の財産を遺した事を知つて、ノラと結婚しようと考えて居る。二人の間に結婚の相談が進み始めた時、突然老人は飛び起きてマイケルを捕へ、ノラには速座に家を出て行けと云ひ渡す。マイケルは性來憶病な男であつた。殊に金が目的であつたのであるから、こう成つてはノラと結婚する氣は全然無

く成つてしまふ。ノラは出て行かなくては成らない。浮浪人は遂に彼女と同行しようと思出した。己れの過ごす生活はつらいものであるが、其の中に限りない人生の愉快を享け得られるものと浮浪人は云ふ。ノラは寂莫な生活を楽しんだ。二人は雨の中に見えなく成つてしまふ。ダンはマイケルを止めて、彼が温和しい人間だから今迄の事は氣に止めないと云ひ乍ら、ウィスキイを注いで健康を祝し合ふ。

筋といふのは此れだけである。此れはシングの作として、詩味に富んだ方ではないが、作中の人々の言葉は先きに云つた如く、不思議な美しさを持つて居る。愛蘭殊にダブリンの言葉は最も美しい英語だ相である。愛蘭人の英語が一般に英蘭人や亞米利加人の英語に比して、ユーフラネイに優れて居るのは事實で

ある。シングの書いた科白は皆此のユーフラネイの點から云つても最上のものである。

シングは此の「谷の影」で人々の心理に多くの興味を有して居た様である。女主人公ノラは此の場合イブセン流の「戀愛の自由」といふ様なものを象つたものとは見度くないと思ふ。ノラは唯詩と想像とに富んだ一個の女と見ればよい。彼女のこゝろいふ性質は寂しい谷に彼女と全く相反した性情を持つ老いた夫と暮して居る中に、發達が鈍つてしまつた。ところが新來の男の話から此れが復活して、苦しくても、面白い事のある廣い世の中に出て行つたのである。彼女が浮浪人と同道したのは、愛の問題として見るよりも、如上の性質の働きと見る方が至當であらうと思ふ。彼女は僅かの財産を目當てにダンに嫁した。併し

其の後に至つて單調な、谷の生活に堪えられなく成つた。そして少し許りの畑や牛や羊を持つてるといふだけのダンを夫として毎日朝から晩まで霧ばかり眺めて、其の外には大嵐の名残りの折れた木々の間に叫ぶ風の音や、雨に勢を増して吠える谷川の音ばかり聞く生活をした自分を大馬鹿だつたと思ふと彼女は自身に語つて居る。

此の作の最後はアイロニカルである。シングはこゝにいふ風な「終り」を好んで居る様である。

所謂道德的の見方からすれば、ノラの行爲は明かに不貞である。愛蘭の人達の或る者は、此の作を眞の愛蘭人の生活ではないと云つた。此れの始めて上演された時には種々の批難が浴せられたといふ。此等の反對家は皆此の作のモ一

ティグが、全く異國のたるといひ、愛蘭の家族生活の道德程度の高い事を誇つて、殆んど總べて不道德を材とした英國のツサエテドラマを其の對照として擧げて居る。更に或る評家の説くところによると、浮浪人と云ふのは鼠賊の類と見られて居るもので、此の「谷の影」のみならず他のアベイ座上演の脚本に出る程、愛蘭でポピュラーな性質を持つたものではないのだ相である。けれどもシングは愛蘭の僻地を旅する間に多くの此の様な浮浪人達に接して、其の野性と詩趣とに非常な興味を感じて居たがために、自然其の最初の作に此れを書いたのであらうと云ふ事である。要するに「谷の影」は優れた一幕物である。

此れは却つて愛蘭の生活に委しくない我々の方が、唯藝術品として眺めるため、一層深い感興を以て鑑賞する事が出来るのであらうと思ふ。此の作は又時

として In the Shadow of the Glen を稱せられる。

第二の作も亦一幕物で「海への騎手」(Riders to The Sea) である。

此れには「谷の影」の農夫の生活に對して、漁夫の生活が描かれた。海を家として其所に命を終る人々の生活は荒く勇ましく且つ悲しいものである。此の作は愛蘭の西海岸の島に場所を取つて居るが、或る人の云つた様に潮の香ひが全體を通じて流れて居る。此れはシングの書いた中で最もグルーミーな作である。

此の作に動く人々に取つて、海は命であり又死である。

モウリアといふ老婆は漁夫の妻で六人の息子を持つて居た。けれども恐ろしい海は既に其の夫と四人の子供を奪ひ去つた。此の作の始まりで、マイケルといふ息子の行衛が不明に成つて老婆は頻りに嘆いて居る。老婆の二人の娘は若

い僧侶が持つて來て呉れたシャツと靴下をしらべる。ドネガルの方で溺死した人の身體に着けて居たといふ此の二品は正しくマイケルのものであつた。二人の娘はこゝにマイケルの死を知つたが、老いた母親には此れを秘す事とする。其の日は海が荒れて居た。ところが今は唯一人の息子と成つたバートレイは對岸に開かれる馬市に行くために出發しようとして居る。老婆は此れを心もとなく思つて、いろ／＼と引き止めようとしたが、青年は到頭出て行つてしまふ。娘の一人のキャスリンは母親がバートレイの出發に「祝福」^{ブレスン}を與えなかつたのに氣づいて注意をする。老婆は此れを聞いて急いで外に出て行つた。彼女は路傍でバートレイの馬に乗つて海岸へと急ぐのに逢つて、此れを祝福しようとしたのであつた。けれども彼女は不思議な幻影を眼前に見た。彼女は明かにバートレ

イの馬に跨つて通り過ぎるのを見た。しかもパートレイのあとには小馬に乗つたマイケルが従つて行つた。此の不思議な幻影はマイケルの死はもとより、パートレイも亦不慮の死に逢つたといふ直覺を老婆に與えた。確信は當つた。パートレイは海の中に落ちて溺れ死んだ。彼の死骸は人々に擔ぎ込まれる。老婆は新たに死んだ二人の息子の靈並びに生き残つた娘達や自身に對して神の加護を祈る。

此れは一幕物であるが、印象の點から云ふと極めて強いものである。パートレイの出て行く時、作家の強い筆致は既に彼の運命を明かに人々に豫知させる。同時に彼の去つた時、老婆モウリアの心にも、最後の息子を失つたといふ感じが起つて居る。後女が戸外から歸つて來て不思議な恐ろしい幻覺を物語るところ

は極めて強く書かれて居る。老婆は最後の息子をも海のために奪はれた事を明確に感じて、人々の死んでしまつたあとに生き残つて居る氣は無いと云ふ。パートレイの死骸がいよゝ運び込まれた時、老婆の胸には新らしい悲みが湧き、それと同時に不思議な反抗的な安心が生じた。

皆これで死んでしまつたから、此れからは如何に風の強く吹く日、海の烈しく荒れる日にも自分は心配したり、祈つたりする必要はない。………外の女が泣いて居る時に、自分は海がどうであらうと氣にする必要もないといふ様な悲しい、反抗的な、あきらめの言葉を、あたりの人々の姿も目に入らない様な態度で彼女は口にする。

誰しも氣のつくように「海への騎手」にはメーテアルリンクの氣分劇に似た感じ

がある。いふ迄もなく海は大きい黒い運命の象徴である。唯シングの作ではメーラルリンクの氣分劇のアトモスフィアのみなものと違つて、立派に性格の描寫にも成功して居る。此の點に關しては批評家モウリス、ブルジョアもアトモスフィア、プラス、キャラクターゼーションと云つて居る。

「ティンカーの結婚」(The Tinker's Wedding)は半ば宗教的な半ば邪教的な感じの混合した作である。此れはシングの六篇の中での最も劣つたものと云つてよいであらう。ティンカーといふのは愛蘭のジブシーともいふべき浮浪民のことである。二人の男女のティンカーが正式に結婚をしようとする。彼等は十志の金を蓄え、且つ錫の鐘を作つた。そして通り掛つた僧侶に式を司る事を頼む。僧侶は十志と錫の鐘とを報酬に得る約束で、此れを承知する。ところが男のティン

カーの母親が、其のあとで錫の鐘を盗み去つて酒に代えてしまふ。二幕目に僧侶の來た時、金は有つたが、錫の鐘は空瓶と變じて居るのが、發見される。此の僧侶は二人が己れを欺いたのを怒つて、他人の驢馬を盗んだといふ様な彼等の悪事を探偵に告げようといきまく。始め二人殊に女の方は、鐘を盗んだのを男の母親の仕業と知つて爭論して居たが、此の僧侶の言葉を聞くと、三人は急に爭論をやめ一致して彼に對した。そして到頭僧侶は三人のために縛られてしまふ。僧侶は閉口して告訴をしないと誓言する。三人は此れを聞いて彼の縛を解き、此の場を逃げ去つてしまふ。其のあとに僧侶は立ち上つて、ティンカー達を呪ひ、ラテン語の經文を唱え始める。

此れは寧ろ一幕物としたらよくはなかつたらうかと思はれる。作中ティンカー